【シンポジウム記録】

「地方創生」再考：
島根のこれからを考えるための新たな視点

本稿は 2018 年 6 月 30 日に島根大学において開催されたシンポジウム「『地方創生』再考—島根のこれからを考えるための新たな視点」（島根大学法文学部 山陰研究センター主催）の記録である。

開会挨拶・趣旨説明

○福井栄二郎（島根大学法文学部）

皆様こんにちは。大雨で足元の悪い中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。ただいまより、島根大学法文学部山陰研究センターシンポジウム「『地方創生』再考」を始めたいと思います。はじめに当センター長・田中則雄より一言ご挨拶を申し上げます。

○田中則雄
（島根大学法文学部 山陰研究センター長）

皆さんこんにちは。ようこそこの雨の中、山陰研究センターのシンポジウムへお越しくださいました。私たちの山陰研究センターは2004年の４月に発足いたしまして、山陰の地域課題の中で人文社会科学に属するもの、地域再生、エネルギー問題、歴史学、文学といったテーマでプロジェクトを立て、そこに研究者が集って共同研究を行っております。

その成果に関しては、今日のようなシンポジウム、あるいは企画展示、それからロビーの方で紹介している出版物などによって発信しています。

今日のテーマに関わって少し申し上げたいことがあります。我々自身の地域がこれからどのようになっていくのか、我々自身が地域をどうしていくのかという将来像を描くということは、我々住民自身の仕事だと思っております。今からちょうど１年前、昨年の６月に三江線廃止の問題をテーマに取り上げ、山陰研究センター主催のシンポジウムを地元の川本町で行いました。その時私もフロアの方で聞いていたのですが、壇上の研究者の方が「最後は住民の皆さんで、自分自身のこととして意思を決めてください」と呼びかけられていました。その通りだと思いました。主体性ということが一番大切だと思います。

ただ、その主体性というのは、よく注意しないと、いわば「擬似主体性」と言いますか、主体的に考えた気持ちになってしまうということが起こり得るのではないかと危惧します。今、知性の欠如ということが指摘されています。どう考えても道理の通らないようなことを無理に言い張る、追及されると開き直る。そのようなことが堂々となされています。やはり、きちんと理屈に沿って物事を客観的に考えていく、そこに立ち戻らなければいけないと思います。

主体的に考えているというつもりになっていても、実は知らないうちに声の大きい人に引きずられていく、他人のある考え方に知らないうちに染まってしまって、自分で考えたような気になり賛成してしまう、というようなことが起こっていないか、一度振り返ってみないといけないと思います。いわば知性を伴う主体性というのが大切になってくると私は考えます。そして、その際にやはり一番重要なのは、学問的な知見だと思います。大学はそこをしっかり支えていかなければならないと思っています。学問的な知見に基づいてきちんとした事実・歴史・データなどを提供して

住民の皆さんと一緒に考える、それが研究者のなすべきことであろうと考えています。

今日のテーマは、本当に喫緊の課題で、私も島根県民の一人として考えなければならないと思いながらこの会場へ来ました。このあとご紹介があると思いますが、島根に深い縁をお持ちの吉川先生に最初に講演をしていただき、続いて地域に密着して各領域で活躍されている方々がご報告され、それからディスカッション、と進んでいきます。どうぞ皆さんと一緒に考える場になりますよう、よろしくお願いします。ありがとうございました。

○福井

今日は、たくさんの方においでくださいまして本当にありがとうございます。それでは最初に簡単な趣旨説明の方を法文学部・関よりお話しさせていただきます。

○関耕平（島根大学法文学部）

本シンポジウムの趣旨説明として、最初に全体にかかわるお話をさせていただきたいと思います。島根大学法文学部で財政学・地方財政論を担当しています、関と申します。よろしくお願いいたします。

地方創生という言葉は、皆さんもたびたび耳にした事があると思います。早くも、この地方創生という言葉が打ち出されてから４年近く経ちます。改めて再考してみたいというのが、このシンポジウムの趣旨であります。ここでは、政府の言う地方創生というのは何なのかという事を少し考えてみたいと思います。地方創生は、地域再生と同じ意味なのかどうなのか。私は、同じ意味ではないと考えています。

例えばですが、お隣の鳥取県出身の石破地方創生大臣（当時）がこういう発言をしています。「うちの町を良くするためにと地方から案を言ってくれれば、人も出すしお金も出す、支援をするが、やる気も知恵もないところはごめんなさいだ」と言っているんですね。地域にたいして「ごめんなさい」と謝っているのがよく分かりませんけれども、切り捨てますよという意思表示なのかな、と解釈できます。

また、地方創生を打ち出した国会冒頭の施政方針演説で安倍首相は、海士町を事例に出しながら、地方創生に取り組む意気込みを話しているのですが、結論は、最後に一言、「やればできる」と言っています。やればできる、できないところは……となるわけです。石破大臣の発言とかなり近い、切り捨てを連想させるような印象を、私自身は当時持ちました。

この地方創生がどんどん具体化され、地方自治体によって地方創生政策が打ち出されていきます。その政策の中身を見ますと、例えば島根県版地方創生総合戦略というかたちで県が、さらにはそれぞれ市町村や地域がこの総合戦略を策定する、こういう枠組みで政策が進められてきました。そして、その計画を国が審査し、国が認めれば交付金を獲得できる、さらに、そのお金で地域におけるいろいろな取り組みが実行される、こういう枠組みとなっています。

ここで重要になってくるのは「KPI = Key Performance Indicator」というものです。これは業績を数値化した指標です。こうした数値目標を決めて、これを自分たちで設定し、クリアするという枠組みで地方創生政策が進められてきています。自治体の方々が相当苦労し、努力をしながら進めています。ちょうど数日前、６月28日の山陰中央新報に関連の記事が掲載されています。例えば今日のシンポジウムのテーマにもなるように、雇用の創出数、社会減を食い止めること、UI ターンの受け入れ人数、縁結びサポートによる婚姻数、小さな拠点づくりに取り組む公民館の数、介護を必要としない高齢者の割合、こういった目標値を決めて取り組んでいるのです。しかしながら、18項目ある中で島根県の場合には12項目について、まだ結果が出し切れていないという記事でした。

何もこの数値目標を達成できなかったことが問題だというつもりはありません。果たしてこう

やって数値を設定して取り組む、このこと自体は必要かもしれませんが、もう少し違う視点からこの地方創生政策というのをとらえ返す、もう一度考え直す必要がないだろうか、そこでの新たな視点を持つ事ができないだろうか、というのが今回のシンポジウムの企画趣旨であります。

地方創生は、人口減少に歯止めをかける、東京の一極集中に歯止めをかける、という目標に向けて進められようとしています。そして、具体的な数値目標の達成が迫られるという状況下で、特に自治体職員の皆さんは苦労されておられます。それをどういう視点から問い直すことができるでしょうか。

私個人としては、二つの視点から問い直す機会にできればなと思っています。第一に、実際の地域住民の方々の日常の感覚、そして生活の感覚、私たちの常識です。ここから、もう一度地方創生を捉え直してみることができるのではないか。第二に、地域再生の現場からの視点です。今日は３つの個別報告をいただきますけれども、実際に地域再生に向けて模索し、活躍されている当事者の方々から、今の地方創生の政策枠組みを捉え直し、考え直す、そんな機会にできればと考えています。本日のシンポジウムが実り多き事を願って、最初の趣旨説明とさせていただきます。ありがとうございました。

○福井

ありがとうございました。では続きまして、基調講演といたしまして大阪大学の吉川徹先生にお話をしていただきます。「島根県のローカル・トラックと関係人口」というタイトルでお願いいたします。

「島根県のローカル・トラックと関係人口」

吉川　　徹（大阪大学大学院人間科学研究科）

○吉川

大阪大学の吉川でございます。ご紹介いただきましたとおり「島根県のローカル・トラックと関係人口」というタイトルでお話をさせていただきます。ちょっと聞きなれない言葉だと思いますけれども。

ところで、いきなりなんですが、サッカーのワールドカップ、皆さんご覧になっているでしょうか？ワールドカップの試合、日本が16強まで行ったわけですけれど、あれを観ていると、サッカー解説者と言う人が出てくるんですね。それで、すごく詳しく色々教えてくれるんです。でも「この人誰やったかな？」というふうに思う事があってですね。「解説者だって言うけど、解説するほどサッカーの事くわしいの？」と。それで、よく調べてみるとＪリーグの元プロサッカー選手だったりという事があるわけです。

私は島根県解説者にあたるのかどうかちょっと疑問なんですが、今から島根県のことを解説します。そうすると「島根県の事そんなに詳しいの？あなた誰？」というところがサッカー解説者と同じようにあるかな、というふうに思います。そこで改めてちょっと自己紹介をさせていただきます。

じつは私の父親が以前にこの大学にお世話になっておりまして、この大学に県外から着任したのが1965年であります。その翌年に、宍道湖畔にありました松江市民病院っていうところで私が生まれています。11月３日の文化の日生まれなんですけれども、あの頃はこの日にどう行列があったんですね。当時ですから男の子が生まれるか女の子が生まれるかわからないという事で、この日に生まれた子がもし女の子だったら、と言いますか彼は女の子だと信じていたみたいですけど、この

子を「松江ちゃん」という名前にしようと決めていたらしいんです。ところがですね、生まれたのが私で、男の子だったので名前は「松江ちゃん」にならなかったんです。非常に、なんでしょうね。着任したばかりなのにこの街が好きになったんだな、という事をちょっとこの話から思い巡らせるわけです。

その後私は、松江南高校を卒業しまして昭和60年、1985年に島根県から流出しました。ですから、平成の島根県を知らない流出県人という事になります。もう長いですね。気が付いてみると、34年も大阪のほうに出て暮らしています。

で、私の父親および母親なんですけども、その後ずっと松江市に住んでおります。松江市は福祉行政のレベルが高いですから、ずっとお世話になっているのです。この老親がお世話になっているという意味でも、松江市・島根県の関係者であるというふうに言えるかなと思います。

そしてですね、大阪大学で教えていますと、非常に優秀な学生さんが島根県からやってきます。これまでにゼミの学生でも何人も、県内のいろんな高校から来られた方の指導をするということがありました。（松江）北高、（松江）南高・出雲高校、（松江）東高もですね。そして今、私の大学には田中輝美さんという優秀な院生さんがいまして、一緒に研究をしています。そういう意味で島根県のサポーターだというふうにも自負しているわけです。

さらに、これもまた後で説明しますけれども、『学歴社会のローカル・トラック』（吉川2001）という今の奥出雲町（旧横田町・仁多町）の研究をしばらくした事がありますので、島根県を研究対象とする社会学者というふうにも言えます。

専門は実は島根県研究ではなくて、「社会階層論」というもので、大卒層と大学に行かなかった人の人生のチャンスがどれぐらい違うのかという事などを研究しています。つい最近、この４月に出した本ですけれども、新書で『日本の分断』（吉川2018）という本があります。そこに私の専門研究の内容が出ておりますのでご参照ください。

今日の講演で私から何をお話しするかというと、後ほどお話しいただくそれぞれの地域に密着した事例の「外側」にある、島根県の今置かれている状況について見ていこうと思っています。

まず県民人口を考える、ということです。これは誰がどんな規模で移動・定住をしているのかを考える、ということです。ローカル・トラックという言葉は、ごく簡単に言いますと、島根県からの人口流出の力学を考える言葉です。アウトバウンドという言葉がありますけれども、人口社会減をみるのです。この言葉は、私が研究で扱っている島根県の人口流出を説明するためのものです。

他方、関係人口というのは、これは田中輝美さんの報告の方で詳しく説明があると思いますけれども、概略を言いますと島根県への流入あるいはUターン回帰というような人の流れについて、その力学を社会学的に研究するときの専門用語です。

ですから、タイトルにある「ローカル・トラックと関係人口」というのは、インバウンドとアウトバウンドの人の流れを見ていくという事になります。こういう流れで今からお話をさせていただきます。

さて、県民人口を考えると言いましても、私の知っている島根県は、恒松制治知事の人口80万という県です。その時代から冷凍保存したようになっていて、その後の島根県の事を私は知らないわけですけれども、当時人口80万だったのにずいぶん減って今は68万4000人という事だそうですね。年間5000人の減少というのがこのところ継続しているそうです。しかも、生産年齢人口、つまり16歳から65歳の人口が少ないというのが島根県の特徴です。

当然これは島根県としてもよく分かっていまして、県の政策企画監室の方で２年前に、「島根県の人口ビジョン」という形でこの状況について数値分析をして、今後の在り方について考えておられます。非常によくできています。

じゃあそれを受けて具体的に何をしているのかという事ですね。県民に見えるところで行われている事というのは、「高校魅力化プロジェクト」、

そして、ふるさと島根定住財団のUIターン等々の促進活動ですね。定住財団というのは、私も昨日行ってみたんですけれども、松江駅のところのテルサの３階にあります。あと「しまコトアカデミー」という東京での島根県の活動もありますね。これは田中さんの方で報告があるかと思います。このような活動で人口減少を食い止める動きをしているわけです。

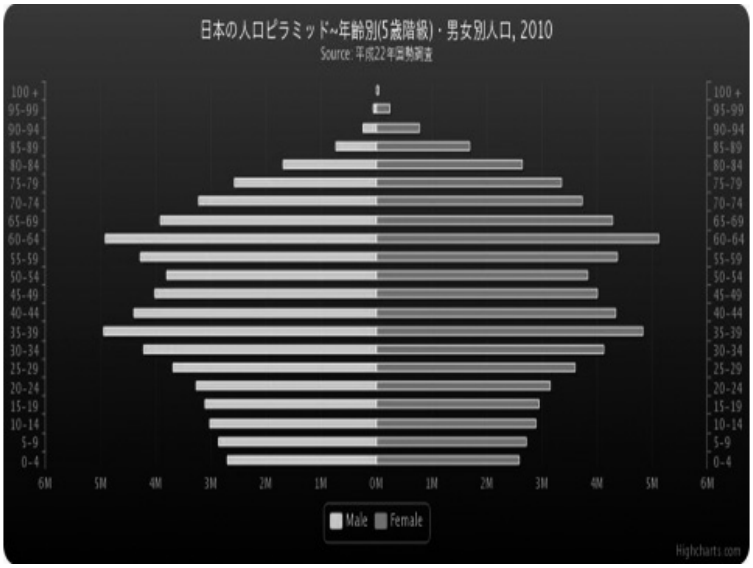
ところで人口減少の内訳ですけれども、島根県の人口は毎年5000人ずつ減っていっています。しかし確認しておかなければならないのは、ここには人口自然減が年間4000人あるということです。多くの後期高齢者がお亡くなりになってしまいますので、これは避けられないこと、という面があります。

他方で、新聞報道なんかをみるとわかるんですけれども、島根県の出生率、合計特殊出生率ですね、これは1.72という数字です。全国平均が1.43ですから、沖縄・宮崎に次いで全国３位で、毎年のことですが極めて高い水準を出している。どういうことかというと現役世代の女性が、言い方が適切かどうかはわかりませんけれども、「順調に」あるいはとても「頑張って」、赤ちゃんを産んで人口を増やすという動きを、ほぼいっぱいまでやっているのです。でも、やっぱりおじいちゃんおばあちゃんがたくさんおられるので、人口は少しずつ減っているということなんですね。

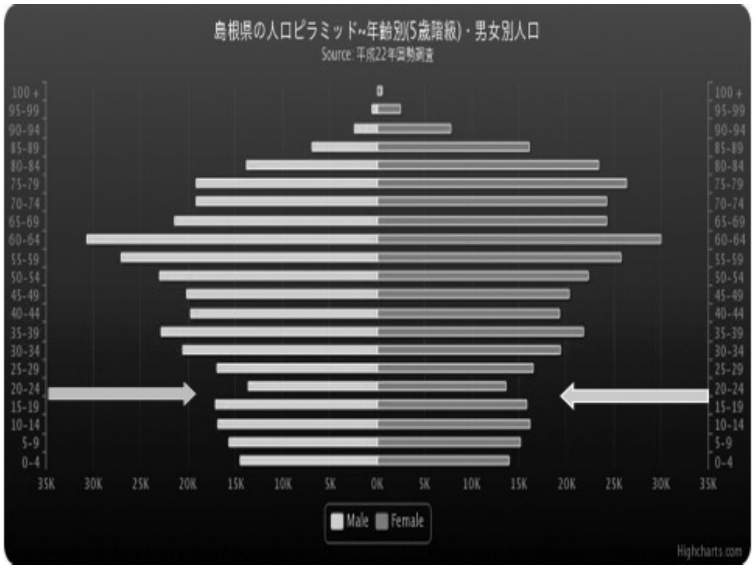
高齢化先進県と言われる島根県では、これは致し方ないことであるわけです。ただ、これも言い方が難しいんですけれども、人口のサイズは小さくなりますけれども、だんだん人口ピラミッドが下の方に降りてくる現象ですから、これを「若返り」というふうに見直すこともできるかなと思います。全国に先駆けて若返り始めている県、これが人口自然増・自然減というところの島根県のポイントであります。

問題なのは人口社会減です。つまり生まれる／亡くなる、という事ではなくて、この県から出ていく／入ってくるという人たちの流れです。計算しますと、人口社会減は年間マイナス1000人プラスアルファという事になります。

1000人減るだけといっても、減った人たちが出生力の高い世代であれば、新生児数も併せて減っていくということになります。1000人のうち半分が女性であるとして、その人たちが県外に出ていくのです。しかも、後から見ますけれども、18～20歳というところで人口が減っているわけです。そこが減っていく事は全体の人口減の大きな要因になります。ですから、そちらに議論を集中させていきます。



7

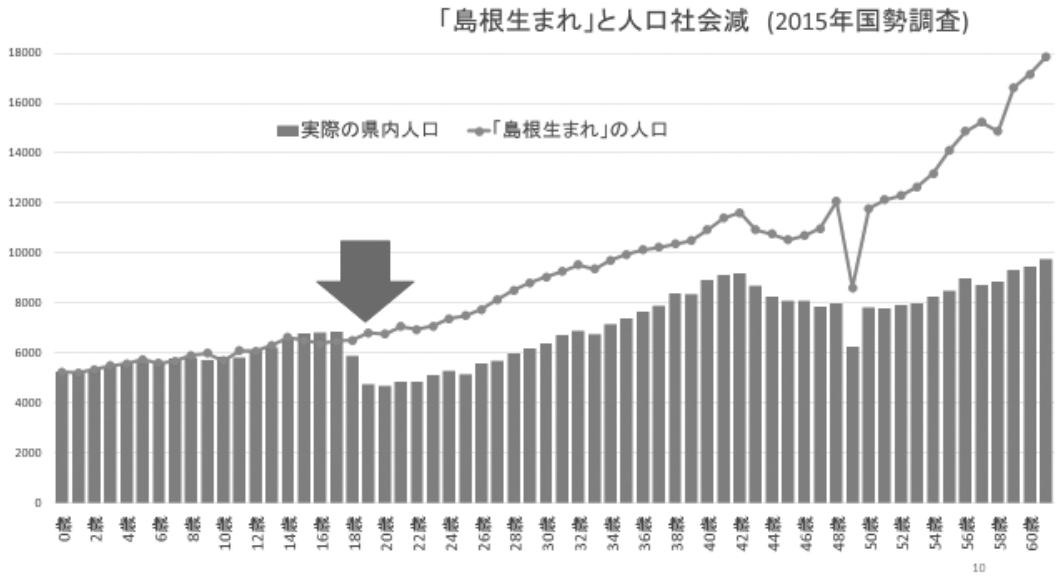


8

これは全国の人口ピラミッドです。これが島根県になるとどういうふうになるのかというと……こうなります。もう１回見ましょうか。全国はこういう形なんですけれども……島根県はこうなっています。島根県はおばあちゃん多いですね。で、気になるのは、結構「ウエスト」が細いな、という事です。最初から、つまりボトムの部分が減って行くんだったら人口自然減という事になりますけれども、これを見てわかるとおりここで力が加わって……という事になりますね。

「これは一体何だ！」ということでさらに見ていくと次のことがわかります。これは島根県の人口で、先ほど見たのと同じ数値なんですが、生産年齢のところ、だいたい60歳ぐらいまでで切り分けています。一見すると大した事は起こってないというか、深刻なことは別にないなと思うんですけれども、次を見るとあることがわかるんです。

実は、島根県で毎年何人の人が生まれるのかと



10

いうことは、人口動態としてわかっています。なので、同じ出生年の人たち（県民）が生まれた時には何千人いたのかという事を計算してここに示すことができるわけです。そうするとですね、島根県で生まれた人が一人も島根県を出ずにこの県を構成していれば、このオレンジのラインになるわけです。オレンジのラインと実際の青の部分の差はどこで発生していますか？　と言うと一目瞭然ですよね。18歳時に力が加わっているわけです。

これは何だ？というと、この社会減の力というのは、島根県民にとっては当たり前なんですけども、就職・進学で県外に出て行く人の流れです。これをローカル・トラックというふうに私は名付けているわけですね。

この人の動きを整理する時の「整理箱」としては、18歳ですからやっぱり就職するのか大学・短大等に進学するのかという進路の大卒・非大卒の分断を考えることになります。若い人材を20歳までに仕事に就く非大卒層と、大学進学する大卒層に分けて考えるということです。これが私の専門領域です。

もうひとつは、流入と言う時にＵターン・Ｉターンという出身地を考えていくという事です。今島根県がやっていることを人生の段階に応じて整理しますと、15歳から18歳までの人口を社会増しようという動きがあります。これはご存知の通り、「しまね留学」、つまり魅力化16校への県外からの生徒さんの受け入れということです。この図の青いところをみると、15～18歳の人口はわずかですが、出生数より増えているんですね。

それじゃあ高卒時はどうか。先ほど見ましたように、18歳で県外就職・県外進学ということで大量に人が出て行く。だけど、島根大学がありますから。島根大学にあるいは県立大学に県外から入ってくる流入もあるということです。

さらに20代の前半というところでは、島根県出身者がＵターンして県職員になるとか、県の企業に勤めるというような形があります。ここに来ている方は今、島根県におられるわけですから、１回県外に出られて帰ってこられた方が少なくないはずです。プラスＩターンという方もあるわけです。そのように「UIターン」というので人口を増やそうということが、今島根県が取り組んでいる動きであるわけです。

けれども、いったん県内に受け入れるんだけれども、すぐに出て行ってしまう人もいます。仮にこれを「風の人」と言いましょうか。２～３年、あるいは４～５年暮らした後に再び流出していく人がいるわけです。これらをプラスマイナスしていくと島根県の人口はどうなるか、ということなんです。

これについて、大学に行かなかった人たちはどうか。島根県は、高校まで県内で教育した人のうち、県を支える人材として何人を高卒就労して残すという計算をしているのか。まず島根県の18歳人口は約6000人です。これには簡単な覚え方があって、日本の人口は１億２千万人なんですけれども、そのうちの１％が毎年の新成人の数で、約120万人になります。今の18歳19歳20歳というのは、日本の人口ピラミッドのうちの１％ずつなのだというふうに覚えてください。そうすると、島根県60数万人のうち、18歳人口はおおよそ6000人強という計算になるわけですね。

この約6000人のうちの46%が大学に進学します。島根県は大学進学率を落とさないように頑張っていますので、鳥取県よりちょっとだけ高くて、たくさんの人が大学に行きます。それでも大学に行かない、専門学校・就職という人たちは約3200人います。

この約3200人のうち県内で就職する人が1100人です。県外に最初から就職する人は700人で、専門学校進学はほぼ県外なんですけど、これが1400人います。これらを合算して、20歳くらいのところでどれぐらいの島根県出身者が島根県の労働力になっているかというのを見ると、非大卒の約3200人のうちのほぼ2000人です。つまり約1200人が県外に出て行くという計算になります。

厳しい計算をするようですけれども、なけなしの県費で県職員である先生方が育てた人材が1200人も県外に流出するというのは、島根県としては

とてももったいないことです。それでも約2000人は残っているということなので、非大卒層はまずまずの成績だといえるかもしれません。

じゃあこの素晴らしい島根県に、何人の非大卒の若い人たちが入ってきてくれるのか、というところについては、すみません……ちゃんと計算できていません。ですが、おそらく何百人という単位、2～300人いるか、というぐらいで、極めて少ない数字になっているはずです。だから、非大卒の若者たちは、1200人ほどではありますが、ほぼ一方的に流出超過しているということになります。

では、残り半分の大卒層に行きましょう。大卒層の人生は複雑な急流になっています。これが学歴社会のローカル・トラックという私の研究の核心にある構造です。これは、今から20年ぐらい前の研究になるわけですが、1993年の横田高校からの大学進学者の、その後24歳ぐらいまでの聞き取り調査研究です。で、それをしてみるとですね、12～13人の人たちに話を聞いた訳ですけれども、それぞれの人生のパターンが見えてきます。これ、島根県の人たちにとってはごく当たり前の現実で、「見えてくる！」というほどのことでもないんですけれどもね。

何がわかったのかというと、都市に流出してそのまま帰ってこない人たち、これを都市流出といいます。島根県内で大学に進学して島根県を支える人材になる人たち、これを県内周流というふうに言います。それから１回都会に出るんだけれども４年ぐらいの年数を経て、また島根県に戻ってくるというＵターン、あるいは島根県の違う地域に戻ってくるＪターンという３種のパターンの人たちがいるわけです。

これは横田高校のこの時代の例なんですけれども、その比率は時代と地域によって違います。ですが大きく分けると大卒層の人口移動の動きというのは、この３つになるという事です。そしてそれぞれの地方には、固有の流出のパターンがあります。島根県は島根県なりの人口の流量調整の考え方というのを持っていて、その方策に従ってやっているといえるでしょう。そして、この当時島根県がやっていた方法を「旧・島根方式」というふうに言ってみましょうか。この頃、全県をくまなくカバーする小さな県立高校が、それぞれ大学進学の体制をとっていた。どの学校からも一流の大学に行く。東大とか京大とかを含めてですね。できる子は徹底的に伸ばしてトッププラスの成績で県外に出していくという方針で、非常に優秀な先輩たちを出してきたのが平成のはじめの島根県の高校の教育状況であったわけです。

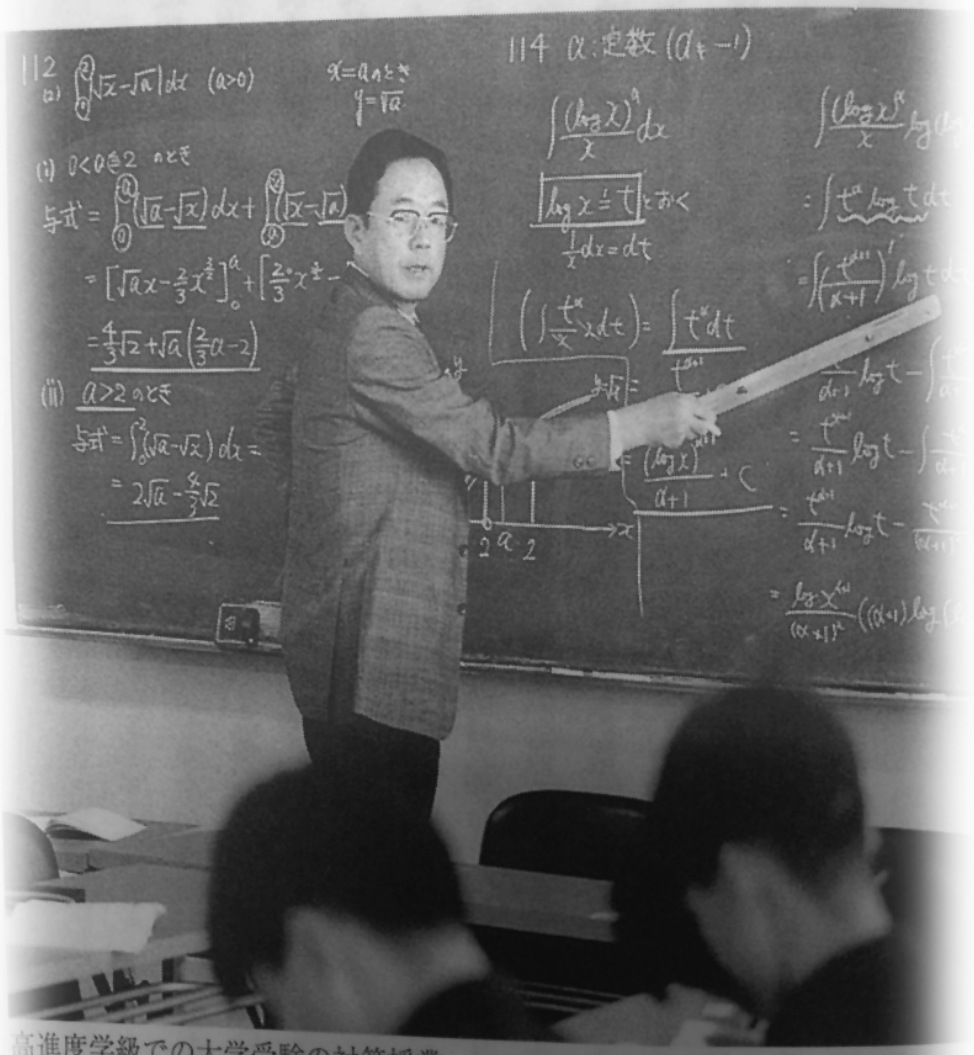
これは私の本の中の写真なんですけれども、もう退職された先生なんですが、1990年代の前半に横田高校で行われていた教育の状況です。この高校は今は魅力化校になっていますけれども、ご覧のとおり、非常に難しい数式が書いてあって、みんながこの授業を受けている。

ここで、「投げかけられた問い」というふうになっていますね。それはこの旧・島根方式とは一体何だったかということです。なぜ島根県は、あるいは奥出雲はなけなしの県費と教育力をかけて「必要以上の」進学実績を出すのか。「必要以上の」というのは、奥出雲に大卒層が７割８割いてもしょうがないですから、必要な数だけ作れば良いわけです。なのに大学に行く人をたくさん作って都市流出させる、という状況を指します。そしたら帰ってこないじゃないですか。

にもかかわらず、どうして熱心な進学指導をやっていたのかというと、自分の県内でエリート大卒人材を育てきれない島根県は、損失を承知で成績上位の俊英から順に県外に出すということをやっていたわけです。

若者たちは、いつかは故郷に戻ろう・戻りたいと思い、夢を追いつつ、現実に流されて、都市に永住して島根県にはなかなか戻ってこない、というような事になってしまうわけです。島根県としては、優秀な人材をそうやって都市部に奪われるというか提供しつつ、わずかな収益率ながら県を動かすエリートを自県出身者の中から確保する事ができる。これが島根県の事情であったわけです。

島根県のローカル・トラックの現状を整理しますと次のようになります。先ほど言いましたよう



高進度学級での大学受験の対策授業

に、約6000人の人がいまして、約3200人の非大卒のうち、県内に就職するのは約1100人という事で、ほぼ2000人の人たちが県外に出て行くという事でした。

続いて、大卒層の方の動きを整理します。大卒の人たちが住む場所を変えるというのは大きく分けて３回あるんですね。大学に行った時、そしてちょうど今大学４年生がやっている就職活動の時期、そしてその後社会人になってからの個々の事情による転職、というような形になります。

大学などの進学者約2800人のうち島根県内に残るのは約600人です。この時点で島根県の高校が育てた人材約2200人を他の都道府県に預けるという形になります。預けたところから人生の途上で戻ってくることをＵターンというふうに呼んでいるわけです。その代わりに島根大学を含めて島根県内の大学には、県外から約1000人の人たちが入ってくる。

で、島根県内の大学は600人の島根県出身者を預かっているわけですが、これが就職活動をすると約450人に減るんです。結局約6000人いたうちのわずか約450人だけが、島根県内に留まり続けて島根県を動かす大卒人材になっているという事です。

ただし、大学を卒業する時にＵターンしてくる人たちというのが何人かいるだろう、そしてＩターンで就活する、島根県の事を好きになって島根県に来るという人もいるだろう、ということがあります。ですからこの他にも少しずつ人が入ってくる、あるいは戻ってくるということがあります。関係人口は、このＩターン流入とＵターンという人生の途中で島根県に入ってくる人たちに着目するものです。

だけど、すごい数出していますよね。約2200人も他県に大学進学者を預けている。これが島根県の実情です。どうしてそうなるのかということなんですけれども、それはですね、大学進学者の6.3人に１人しか県内に残留できない、というのが島根県の持っている特性だからです。全国を比べると、残留者の比率が一番低いレベルにある事がわかります。こうなる理由は簡単で、県内に大学生を収容する組織、つまり大学が２つプラス１。この４月から短大がひとつ増えましたのですが、３つしかないですね。そこの収容力は、全体の約6000人あるいは大学進学者のおよそ3000人に対して、1400人ぐらいしかありません。

数が少ないというのは、ただ単に受け入れる椅子が少ないというだけではなくて、提供している学部の数とか、将来なりたいものになるために学ぶ学問の数が限られるという事でもあります。例えば、歯医者さんになりたいとか、航空・宇宙関係の仕事に就きたいと思った時に、島根県内でそれができるかというと、残念ながらそれは県外に出て学ばなければならないということになるわけです。そういうこともあり、島根県内からは多くの人が外に出て行くのです。

ここで余談ですけれども、見てわかるとおり地方県には大学が少ない。大学は少ないんですけれども、大学が少ない県にたくさんあるものは何か？と言うと……。この国は不思議な国です。大学のない県にあるものの答えは原発なんですよね。聞いた話だと大学１つ作るよりも原発１基作る方がお金がかかるそうなんですけど、原発は雇用も産みますからね。ともかく都会にたくさんあるのは大学で、その代わり原発は都会にはないよ、という構造になっているわけです。大学が少なく、原発がある佐賀とか島根というところは、本当に象徴的な地方県であるということがここでわかると思います。これは余談なんですけれどもね。

もう１つ指摘しておくべき特徴はですね。島根県というのは、一旦入ってきた大学生を島根県内に留めて就職させる力が極めて弱いんですね。これは、島根県はというより島根大学、といっても良いですね。つまりこういうことですね。島根大学は18歳から19歳の人口を約1000人、県外から受け入れる。そういった人たちが４学年ですから約4000人いるわけですね。そしてその4000人の島大生というのは、日本一美しい街・松江で夢のような４年間を過ごすわけですね。とても素敵。そのために松江市は学園通りあたりが非常に栄えてい

るんですよね。そういった、良いこともあるかもしれません。

でもかれらは、「就活は県外志向で！」と考えているのが数字を見るとわかるわけです。約1000人ほぼ全てが県外就職です。しかも、その時に約600人いたはずの県内からの島大進学者のうちの150人もつられて出てしまう。つられているかどうかは分かりませんけれど、450人しか残らないという事になっている。

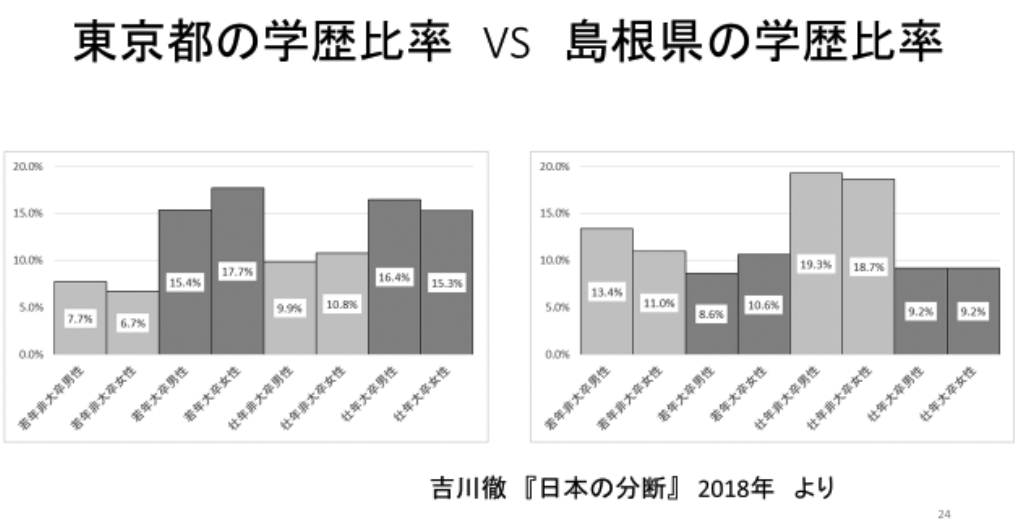
これは、ここの大学の就職実績をもうちょっと調べなければはっきりいえないわけですけれども、例えば、正門の前から広島行きの就活バスを運行しているみたいな事あるじゃないですか。就活バスはどこの地方大学もやっていますよね。でもこれ、島根県からの人口の流れのここまでお話ししてきた課題からいうと、「逆じゃない？」と思うんです。広島から島根県に帰ってくるバスを出した方が良いんじゃないか？といいたいぐらいです。

とにかく、せっかく島根に関係を持ってくれた島大生が、４年で出て行くという話はもったいないと思うんですね。要するに「島大留学」という形になって、「４年間楽しかった」ってなっただけでは、島根県の人口は増えない。関係人口は増えるのかもしれませんけど、定住人口は増えていかないということです。

結果どうなるかというと、これ私の本からの転載なんですけれども、東京都の学歴比率を男女と若年・壮年、そして大卒・非大卒というので分けます。島根県の方も同じように分けますと、このような図柄になります。東京では若年・壮年に限らず大卒層が非常に多いんですね。この青い方です。男女共にそうです。それに対して島根県というのは、大卒よりもはるかに非大卒の人が多い。そして壮年の非大卒の人が多いというふうになっています。街中で会う、電車の中で出会うという人たちの比率が、これだけ島根と東京では違っているということです。

どうしてこうも違ってくるのか、というのを今まで喋ってきたことから考えてみるとですね、高卒層はうまいこと県内に残せているんですけれども、大卒若年層を県外に人口ピラミッドがへこむぐらい出して、かれらがそのまま帰って来なくなっているというのが島根県の流出の事情であるわけです。

まとめます。そうすると、非進学者では約1200人が県外へ出ている。でも、まあこれは、歩留まりとしては良い方じゃないかと思います。しかし大学進学者に関しては、毎年毎年2200人を県外に出している。県内には約600人が残留するんだけれども、最終的に島根県に残るのは約450人くらいである。で、島大生は一時的に松江市を潤しま



すが、「風の人」になっている。これももったいない。せっかく縁を持ったんだから、なんとかできないかなというふうに思います。

これをあえて効率良いところで均衡させようとするならば、おそらく島根県は大学進学率を30%ぐらいまでにするとちょうど良いというようなことになるかもしれません。なぜならば島根県の労働力人口として必要としている比率がそれくらいだからです。理屈の上では、それよりたくさん大卒層を作ると、都市部に持っていかれちゃうことになる。実情はそうですよね。

それでも、Ｕターンして島根県を動かす人に県外のどこかでしっかり育ってきてもらわないといけないから、出さざるを得ない。これが、島根県がこの50年間やってきたことであるわけです。だから、極論すれば大学進学率を下げれば人口社会減は減る、という事になります。もちろんそれは、あまり現実的ではないですが。

さて、それでインバウンドの方はどうなのでしょうか。こちらの方は続けて田中さんの報告がありますのでそちらに譲る事になりますけれども、少しだけ触れておきます。私はこの若年人口のインバウンドを重点的に考えるという島根県のやり方を、「新・島根方式」と呼んでもいいんじゃないかと思います。今までの古いタイプの、流出一辺倒の島根県に対して、新しい動きが出ているな、というふうに思ってみています。

そのうちの１つが「高校魅力化プロジェクト」です。これは皆さん知っていると思いますけれども、平成30年度の実績で178名の県外の生徒を受け入れている。つまり18歳までのところの人口が少しだけ増えるのです。ただし、これははっきり言っておきますが、全体6000人のうちの200人ですから、数としては定住人口を大きく増やすというところまでは行っていません。それでも、全く質の異なる若い人たちが島根県内の小さな学校を活性化しているという事ですから、その存在意義は大きい。と、いうのが島根県が重点的に考えていることなんですね。

そして、合わせて「学校コーディネーター」という事で、これはＩターンの人が多かったりするんですけれども、若い人たちが教育の魅力化というのをやっている、というふうに聞いています。過疎地の学校の生徒数を確保することばかりが目的ではないと言いますけれども、こうして活性化しつつ、学校の生徒数を確保して学校を存続しているということですね。

ただし、これは常に考えなければならないことなんですが、なけなしの県費をかけてやっているということからいうと、どれだけの費用対効果があるのか、ということがあります。今、島大の話をしましたけど、島根大学は国立大学法人で国が運営していますから、県がお金を出しているわけではないですね。でも、県外から来て３年間県立高校で過ごした人が、また県外に出て行くとすれば、先ほど話した島大生1000人と同じ動きをするわけですね。これも実績を見ていかないとわからないんですけれども、東京・大阪から来た子たちは、多くは県外の大学に進学して魅力化校を出ていく。「島根留学」といっているくらいですから、３年島根にいた、というのが一生のうちの１ヶ所、良い経験としてあって、あとはグローバルに活躍する人材になっていくわけです。

でも、これでは島根県の人口ピラミッドには何も影響を及ぼさないということになってしまいます。もちろんそれで、いろんな意味で若い人が入ってきて活性化はするんですよ。ただ、数の上の問題は常に考えなければならない。島根目線で見た時に、「これはどうなんだろう？」というのはちょっと考えておかなければならない。

もうひとつの問題はですね、学校の先生は忙しいんですよね。だから、魅力化を推進するということでいろいろな活動をやるのと同時に、昔の島根方式と同じように良い進学実績を挙げ続けようすると、両方はやっぱりちょっと無理なんじゃないかなと思います。数字をちょっと見ていますと、学力・進学実績のところはちょっと停滞気味なのか、というところが見られなくもないですね。

でもこれも、思い切って、そんなに今までみたいに大卒層を作らなくても良いんだよ、島根県か

ら大阪大学に行く人の数が減ってもべつに構わないよ、というふうに割り切って考えたうえのことならば、それはそれでいいです。得るものもあれば失うものもあるというのが、こういう事を考える時の重要な実体だと思います。どうでしょうか？

さらに、UIターンによる社会増の取り組みとしては、社会人の関係人口を増やして取り込むということで様々な活動がなされています。ここでも人口の数の問題ではないというふうにいわれますけれども、やっぱり費用対効果っていうのをちょっと考えなければいけないと私は思っています。

Ｉターンしてくる人は誰なんでしょうか？　島根県を好きで活性化させてくれる人だというのは分かるんですけれども、大卒層と非大卒層を分けて、その総量を見るということが重要です。大卒層が入ってくるのでしょうか、非大卒層が入ってくるのでしょうか。足りない部分をカバーしてくれる、ということになると、大卒層が入ってくるのか？　そもそも、足りないとはどういう人なのか？　っていう事を考え直すということです。

私が今まで見たところでは、大量に流出してなかなか島根県に帰ってこない県内出身の大卒層の代わりとして、大卒Ｉターン層を受け入れているというのがこの活動の実態ではないかと思います。ここは後で議論しても良いかと思いますけどね。

島根県に責任を持つ人材の確保っていうのは重要であり続けていると思うわけですね。「風の人」って言うような形で、ずーっと暮らした島根県民ではないけれども関わってくれる人が増えていくというのは、確かに良いことなんですね。良いことなんですけれども、……ちょっと言い方は難しいんですが、例えば、だんだん企業が非正規雇用化して正社員が少なくなっているというのが今の日本社会で起こっている事ですよね。そうなると、パートやアルバイトの人たちが物を作ったり物を売ったりする。それと同じように、ずっと何十年も島根に住んだ人じゃない人が島根県を動かすというふうになって、さらにその人たちだけになっても大丈夫なのか？ということにも思いを巡らせます。

私は、ちゃんとした営業しようと思うと、正社員がいてそのうえで、アルバイト・パートの人がいるという形になるのが良いんじゃないかと思うんですね。ですから、ここでの問いは「島根県は正社員にあたるところの人をちゃんと確保できていますか？」ということになるわけです。

旧・島根方式というのは、その正社員を得るために大量に大学進学者を県外に流し出して、何人かが戻ってきて県を動かすエリートになるというものでした。そのため今は大量に県外に優秀な人材を置いています。だからＵターンで帰ってくる人はある程度いますよ。だけど新・島根方式を進めて、10年15年経った時にもそういう優秀な人が十分に育っているのかな、ということをちょっと考えるわけです。

そこで、県に提言したいことがひとつあります。「30代～40代の大卒層に限定して、例えば県職員として30人確保します！」みたいな枠をつくるんです。県職員とはいうけれど、県職員として採用した後に山陰合同銀行に出向するとか、山陰中央新報に出向するとか、松江市に出向するみたいな形で、一定枠で確保した人材を県内の必要なエリート層に振り分けるという形をとればいいのです。しかも、県民によく見える形で。30代ぐらいでＵターンするという「箱」を作ったらどうかなと思うんです。

大阪で地方出身の教え子たちの話を聞いていると「22歳では故郷に帰りたくないんだけれども、いずれは帰りたい。でもいずれ、って言って考えていると椅子がなくなっちゃう」というようなことを言っているケースを見聞きします。昨日ある高校の校長先生に聞いたんですけれども、教員採用では40代～50代でも他県で教諭の経験がある人を島根県の教諭に受け入れるということをすでにしているらしいですね。こういうような形で、足りないエリート層はどこかというのを考えて対応すればいいと思うのです。

ふるさと定住について、「誰でも良いですよ」

と間口を広げるのは大事です。でも、そう言いつつ「Uターン大卒層」というのをひとつの重要なターゲットとして絞っておいた方が良いのかな、というのが私からの提言です。

県外流出者っていうとですね。島根県は今日お話ししてきたとおり優秀な人材を県外に送り出してきたんですが、この人知っていますか？「石見人・森林太郎！」ですよね。これは知っていますか？　最も優秀な財務官僚と言われた若槻礼次郎ですね。それから足立全康とか、東北で「地域おこし？」をやった梨田昌孝さんですとかね。あるいは島根県民だという事をアピールする事は全くない有名人とか、女優さんとかも何人か出してますね。プロ野球選手の和田毅さんも、そして私の大好きなプロテニスプレーヤーの錦織圭さんも、島根県が育てた人材です。

たくさん出て行っていますよね。こういう人たちが２万人３万人という規模で島根県を外から支えているんですね。

関係人口の方はどうかと言うとですね、有名な岩本悠さんという方がいらっしゃいます。私に「松江ちゃん」という名前をつけようとした私の父親も、広島から来て島根大学でずっと退職するまでいて、今も島根に住んでいますからこれも関係人口として外から入ってきた人です。私自身は流出していますけれども。

最も有名な関係人口といえば小泉八雲ですよね。この人は１年ちょっとしか松江にいなかったんですけど。もっと言うと、松江藩の藩祖の松平直政公も外から来ていますし、堀尾吉晴も尾張の足軽だったわけですね。さらに遡るとですね、スサノオノミコトなんかは、少子高齢化に悩む奥出雲を「地域おこし」したというのが大蛇退治の神話ですよね。こうやって見ると、昔から関係人口で支えられてきた県だという事が分かるわけです。そういうことからいうと、オオクニヌシノミコトがそうであるように、県外から来て、国引きをしてくれるというのが関係人口の重要なところであります。この点で、関係人口は「現代の国引き神話」にたとえることができるのではないかと思います。

これに対して、流出のローカル・トラックっていうのは、「現代の鉄穴流し」です。少量の砂鉄を取るために、地形が変わるぐらいにまで山を切り崩して人を流し出している。この事も忘れてはならない、というのが私の方から話題提供させていただく内容になります。ご清聴ありがとうございました。

○福井

吉川先生ありがとうございました。ではここから個別報告を３つお願い致します。まずはじめに、ローカルジャーナリストの田中輝美さんのご発表になります。「島根県のしまコトアカデミーにみる関係人口づくりのプロセス」というタイトルでお願い致します。

「島根県のしまコトアカデミーにみる関係人口づくりのプロセス」

田中　輝美（ローカルジャーナリスト）

○田中

皆様こんにちは。ありがとうございます。先ほどの吉川先生のお話なかなか刺激的で、すごく面白かったしエキサイティングで、なかなか気持ちが切り替わらないですが……。

これから話をしていきたいと思います。ローカルジャーナリストとして紹介いただきましたけれども、どちらかというとこちらに書いてある大阪大学大学院人間科学研究科D1、という立場でお話しさせてもらおうかなと思っています。

固い研究会なのかなと想像して、すごく堅い資

料を作ってきたんですが、一般の方も随分たくさん来てくださったので、ちょっと堅いところを何とか柔らかめに頑張ってみようかな、と思っているところです。今日はですね、先ほどお話が出た関係人口とは何かという事、そしてそれはどうやって生まれるのか、という事を島根県の政策であるしまコトアカデミーというものを見ながら発表していきたいと思っています。お手元に資料も用意してあるんですが、それを少し改良したものを今日使っていますので、どちらかというと画面を見ながら聞いていただければ良いかなと思います。

私がローカルジャーナリストだと言ったり、大学院に通っていると言ったり、一体何なんだ、と、全く私を知らない方のために簡単に私の自己紹介をします。島根県浜田市で生まれ育ち、大阪大学に進学しました。当時仏像がすごく好きで、それで絶対関西の大学に行こうと思ったんですが、その後、山陰中央新報に就職しましたので、Ｕターン人材という事になります。

吉川先生や島根大学とのご縁は深くて、吉川先生のお父様が島根大学の学長でいらっしゃった時に（私は）山陰中央新報の記者になりまして、吉川学長にたくさん取材しました。島根大学と島根医科大学が統合する話を担当して、スクープしたのですが、その吉川学長の息子さんが有名な学者になっておられるという事で取材した事がきっかけで、今、吉川先生と繋がっているんです。山陰中央新報の記者を務めた後ローカルジャーナリストとして独立して、変わらず島根を拠点に、フリーランスのジャーナリスト活動をしています。そのかたわら、フリーランスは勉強しなければいけないですので、もう１度大阪大学に入りまして、吉川先生に指導を仰いで勉強しているという事です。ローカルジャーナリストであり学生でもあるという、そういう立場になっています。

ローカルジャーナリストって多分初めてお聞きになった方もおられるかと思いますが、それもそのはずで、私が自分で作った名前です。というわけで、まだ日本で１人なのでもっともっと増えていけば良いなという事で、いろんな活動をしています。今日はどちらかと言うと最初にお伝えしたようにこちらの大学院生の立場で、関係人口について研究を進めていますので、そのご報告ができればと思います。

「関係人口」に着目する社会背景からまずお話しします。大きく２つあります。１つは本格的な人口減少社会がきたという事です。日本は明治時代以降、基本的に人口が増え続けてきました。ですが、2011年以降は継続して減少し、今後数十年間は減少する事は予測がされています。そうした中、島根に代表される段階的に人口が減少してきた地方は消滅とも言われる危機的な状況になっています。特に「増田レポート」と言う有名なレポートでは、2040年までに日本の約半数にあたる896の自治体が消滅するという内容でした。こうした中で地域を消滅ではなく再生させるという事は、従来にも増して切実で重大な課題となっているという事があります。

一方、もう１つの社会背景です。そうした中、地域再生のために地方の自治体は一生懸命いろんな政策に取り組んできました。それは主にこれまでは、ここに書いてある定住と交流、大きくこの２つの方向性がありました。移住してもらって定住してもらうという事。もう１つは都市・農村交流、観光に代表されるものですね。

ですが、定住の方は「自治体間人口獲得ゲーム」と言われていますが、全体のパイが減る人口減少時代に、どこかの自治体が引っ張ってきて増えてもどこかの自体は減っているという、ゼロサムゲームと言いますが、やはり不毛ではないのか、と。このままやっていてもみんな幸せにならないのではないか、という、そんな限界感についても報告されています。一方の交流の方もですが、以前はずいぶん盛んに取り組まれたんですが、やり続けているうちに地域住民の方が疲れて、「交流疲れ」になって活動をやめてしまうという、そういう事例も報告されています。

こういう従来取り組まれてきた定住と交流に閉塞感が漂う中で、新しい「関係人口」というもの

への注目が高まっています。これは総務省が先日、「これからの移住交流政策の在り方に関する検討会報告書」の中で、定義なり考え方を示しています。引用しますと「長期的な定住人口でも短期的な交流人口でもない地域の人々と多様に関わる者」。「関わる」から取って「関係人口」と呼んでいます。さらに「関係人口」を含めた「地域外の人材」による資金や知恵、労力の提供は地域内の内発的エネルギーとも結びつきやすく、地域再生のひとつの糸口になる、と書かれていて、地域再生にもつながることがこの関係人口に期待されている。そういう新しい存在だという事です。

今回私の報告では、「関係人口」はどうやって生まれていくのか、そのプロセスを見ていきたいと思っています。「関係人口」は、この後お話ししますが、2016年に生まれた新しい言葉です。ですので、これまで「関係人口」で触れたものももちろんありますが、それは「『関係人口』とはどんなもので、どんな意義があるのか」というような事を書いたものが中心ですので、プロセスというものに着目した研究というのはまだあまりありません。

先行研究ですが、最初に「関係人口」を提唱したと言われていますのが、高橋博之さん、「東北食べる通信」という食べ物付き雑誌の編集長をしている方ですが、その方が著書「都市と地方をかきまぜる」の中でこのように触れています。「観光は一過性で地域の底力には繋がらないし、定住はハードルが高い。その間にあるのが関係人口である」。特にこの高橋さんは、首都圏の人が「逆参勤交代」で東北に通ってくる姿を見て、基本的に地方に定期的に訪ねてくる人の事を想定して、交流でも定住でもないその間にある関係人口だ、ここを大切にしよう、と言っておられます。これが2016年です。これが文献上確認される「関係人口」が初めて登場したものになります。

次が指出一正さんと言う「ソトコト」という人気の雑誌の編集長をしておられる方の著書「僕らは地方で幸せを見つける」ですが、そこにまた関係人口が出てきます。これも同じ2016年になります。定住・交流のどちらにも当てはまらない新しい人口として「関係人口」がある。言葉の通り地域に関わってくれる人口の事であって、自分のお気に入りの地域に週末ごとに通ってくれたり、頻繁に通わなくても何らかの形でその地域を応援してくれたりする。高橋さんは通うという事に着目していましたが、もう少し指出さんは広げて、なんらかの形で応援というところまで広げて関係人口を考えておられます。さらに指出さんは踏み込んで、ではどうやって見つけていったら・作って行ったら良いのかという事も触れていまして、今まで自治体は、観光案内所を地域に作ってきたと思うんですが、そうではなくて「関係案内所」が必要ではないかと提案されています。関係を案内する場所として機能する、関係人口になりたいと思っているような方が地域とどういう関係を結んだら良いのか案内するというところと言うニュアンスだと思います。

これを踏まえて今回、どうやって関係人口が生み出されていくのかを考える中で「関係案内所」が重要なのではないかと言う仮説を立て、事例を見ていきたいと思います。

調査対象に選んだのが「しまコトアカデミー」という、先ほど吉川先生のお話にもありましたが、島根県庁が開講している講座です。普通島根県庁が開講したら、島根県で開講すると思われると思うんですが、開講している場所は首都圏です。

2012年度から、今はもう７期目になりました。半年間にわたって７回、首都圏の方が受ける連続講座です。７回のうち６回が首都圏での座学です。残り１回が島根県に来る２泊３日のインターンシップがあります。その座学とインターンシップを終えて最後に自分のプランを発表する、というのがこのしまコトアカデミーの概要となっています。メイン講師として迎えているのが、先ほど出てきた指出さん。そして島根在住の方がメンターとしてサポートしています。三浦大紀さんという浜田市で「シマネプロモーション」という企画会社を立ち上げた方です。定員は15人で受講料

は４万円です。

５期生までに「島根に関わる活動をしているか？」というアンケートをしています。「活動している」と答えたのがその卒業生の中の58.8%、約６割です。その内訳が、首都圏で活動している人が33%、島根に移住した人が25.5%、足して58.8% です。首都圏か島根かどちらかで活動しているという枠組みですが、「関係人口」という考えで行きますと、この首都圏で活動している、つまり、離れていても島根について活動している、そういう人のことを「関係人口」だという事ができますし、島根に移住したという人もいきなり移住したというよりは１回島根について考えたり関わったりする「関係人口」になった後、結果として移住したという方が多いですので、今回は、結果として移住した方も含めて報告していきたいと思います。

「しまコトアカデミー」のサイトには「“移住”しなくても　地域を学びたい！　かかわりたい！」とあります。これまで自治体は、講座を開くと必ず移住定住のため、「首に縄つけてでも引っ張って帰るぞ」みたいな、そういうのが多かったと言われていますが、しまコトアカデミーは「島根に移住しなくて良い。関わってほしい、関係人口になってほしい」と明確にうたっている講座です。

その（受講生）メンバー４人に今回インタビューした中から報告したいと思います。加えてしまコトアカデミーの実際の現場を見ていますので、それを踏まえています。出典は全て私の著書である「関係人口をつくる」から引用しています。

2016年度のしまコトアカデミーでは、まず講座の初回に島根県職員が、毎年5000人のペースで人口が減っていること、消滅自治体に島根県内の８割が該当しているという事、課題先進県であるという事を強調します。普通ですと島根は良い地域だよ、とか、他の自治体の講座でも、水がうまい・空気がうまい・人が優しい、うちはこんなに良い地域です、というプレゼンが多いわけですが、島根県はこんなにうちは大変です！という事をプレゼンされます。そこがすごく今後のポイントにも繋がっています。

続いて、プランを作る上で参考にするワークシートを講座の中で示しています。その中で書かないといけないものが地域課題と、そして自分の強み、スキルやキャリアなどですね、それを書かせる。このワークシートを書いていくと最後の自分のプランが発表できる、そういう仕組みになっています。

調査結果の一人目、中島梨恵さんという方です。横浜出身のデザイナーの方です。島根に興味があったというより、人生を考える中で食や農業に本当は興味があると気付き、なんとなくしまコトアカデミーを受講しました。島根にインターンシップで来てみて、地元の方々が「本当にこの地域をなんとかしたい」と熱く語っている地元愛に驚いて、自分もぜひ何か力になりたいというように変わっていきました。ただ（自分は）デザイナーで、農業については何もできないという事で、昔のキャリアを捨てるしかないと思っていましたが、メンターの三浦さんに、「そうではなく、自分の好きな農業とファッションデザイナーのスキルを使って掛け合わせて何か物事を考えてみたら良いよ」と打診され、なるほどと、自分は「農業×ファッション」で新しいものを作りたいとなって、今は島根に移住してそれを目指しています。

二人目が岡本佳子さんです。島根の出身で、首都圏でリノベーション会社に勤めていましたが、いつかはＵターンしたいという思いを持ってしまコトアカデミーに入ってきました。先ほどの三浦さんと一緒に物件を探すうちに浜田市にいい屋敷を見つけ、三浦さんにテナントに入ってもらう事にして、その物件を借りてリノベーションをしました。岡本さんは二地域居住で東京と浜田と行ったり来たりしながら、管理運営をしていましたが、その後、Ｕターンしました。

３人目が原早紀子さんです。島根出身で、首都圏でアパレルとか複数の職を経験していました。東京がファッションとか流行の最先端ですので、島根はダサいと言いますか、たいしたところじゃ

ない、東京が良いと思っていましたが、最近地元の事を全然知らないし、島根を学べば良いって言うから入ってみるか、という気軽な感じで受講してきました。実際そのインターンシップで、島根の「益田工房」というかっこ良いデザイン会社を訪れた時に、島根もかっこ良いのものあるじゃないかと、ダサいと思っていたけど悪くないなというふうに思った。これは実は、「原さんはここに連れてったら絶対島根かっこ良いと思うんじゃないか」という三浦さんのコーディネートのもと、(原さんは)連れて行かれたんですが、実際この通りになって。転職活動をする中で、結果的に今まで入っていなかった島根が視野に入ってきてUターンしました。

もう一人が最後、山尾信一さんという方です。転勤族で、中学時代を島根で過ごしたそうです。今は東京にいて、各地の食べ物を楽しむ会を開いていたんですが、しまコトアカデミーに入って「地域の人は頑張っているけど東京と繋がってないな。誰か繋げる人がいるんじゃないかな」というふうに実感したそうです。これもまた三浦さんの助言を受けて、旬の食材を東京に届けるという「ハツモノ倶楽部」というものを定期開催するというふうに変わっていきました。

この結果まとめてみますと、もちろんしまコトアカデミーのような「関係案内所」は必要だと考えますが、それだけあれば良いというわけではなく、地域の課題を知って、地域の者や人と出会って、そして自分の強みと掛け合わせるという、もっと細かいプロセスによって「関係人口」、つまり自分が関わりたい、と実行していくという事になるのではないかと考えました。繋げるとこういう感じですね。しまコトアカデミーのような「関係案内所」に入って、その後課題を学んで、人に出会って、自分の強みを整理して、この課題と、×ヒト・モノ×強み、ここが関わりしろという事になり、関わりしろが見えてきて自分が関わっていきたいな、と「関係人口」になっていくのではないか。そこに対して、「関係案内人」と勝手に付けましたが三浦さんのような適切にサポートする人材が必要なのではないかというふうに考えているところです。

ちょうど時間にもなりました。今後まだまだ吉川先生の元で「関係人口」について研究していきたいと思います。引き続きよろしくお願いします。ご清聴ありがとうございました。

○福井

個別発表の２つめはSPReD代表の白石絢也さんです。「中間支援組織から見た「地方創生」の現場について」というタイトルでお願い致します。

「中間支援組織から見た「地方創生」の現場について」

白石　絢也（SPReD 代表）

○白石

こんにちは。今、ご紹介いただきました中間支援組織で、今日はSPReDという名前で上がっていますが、もう１つ「小さな拠点ネットワーク研究所」という一般社団法人をやっております。どういう仕事をしているかと言うと、まちづくり関係の中間支援業務をやっております。僕自身の認識としては地域には必ずビジョンとか、思いを持った方が多かれ少なかれ必ずいるというふうに僕は思っていますし、そう信じております。だけども、その人たちがいかに動きやすい環境を作っていくかというと、やっぱり行政のプロジェクトと地域住民のプロジェクトとは時間の流れ方は全然違うので、そこを間に入って調整するとか、お互いの進め方について少し歩調を

合わせていくための仕事を主にやっているところです。今特に中心になって入っているのが島根県石見部の邑南町ですので、今日はその事例を中心にご紹介したいと思います。

私自身は大田市の出身です。先ほどの吉川先生のお話で言うと、大田を出てそのまま島大に入って、そのまま松江の会社に就職して退職し、その後、大田で個人事業として起業して、そのまま島根県内にずっといるという450人の１人かなと思っています。僕自身は結構冷静に考えた時に、このことはすごく自分の中で大きい部分を占めているなと思っています。と言うのは、まちづくりをやる時に数年前よく言われたことなのですが、「バカ者、若者、よそ者」。そういう言葉をよく聞かれたかと思うんですが、地域で活躍する動く人たちというのは、一回よそに出て帰ってきた人だとか、あるいは全くのＩターン、あるいはそういう事を面白がるようなバカ者か若者である。そこが動けば地域が動くというような言い方をされていましたけれども、僕は多分、どこにも出ていないですし、非常に平凡な人生を歩んで生きている。でもそういう人間でも何かできる事があるんじゃないか、地域に対してできる事があるだろうと思いながら、よそに１回出た人間だから動くのとは違って、地元にずっといるからこその矜持みたいなものが、普段は全然意識してないんですけども、ふと冷静に考えてみるとあるのかなと思っています。

社会的な背景というところは田中さんから概略の報告がありましたので割愛させていただきます。僕が主に仕事の対象にしているのは、中山間地域と呼ばれる地域です。松江の会社の頃は隠岐の島町にずっと仕事で通っていましたし、今は邑南町、その前も浜田市弥栄町とか比較的山間部、あるいは離島、条件不利地域というところが非常に多いです。中山間地域は疲弊しております。たださっきも言ったようにそれでも何かをしたい人、何かをできる人というのが必ずいる。それをどうやって、力としてムーブメントに変えていくかというのが、技術でもないですが、パワーがいるので、そこが必要なんだと思っています。

僕があまり好きではない話として、「島根はすごく良いところですよ」、ここまではいいのですが、「都市は人がごみごみして暮らしにくくって、排気ガスが多くて、ああいうところは暮らすところじゃないから島根においで」というロジックについて。僕はあまり好きではないです。それってただ相手を貶めて自分のポジションを高めるだけの話ではないか。都市には都市の良いところがあると僕は思っています。東京も大阪も好きです。それは例えば島根にはなかなか来ないライブがあったりだとか、買い物がそこでできるという事はあるので、決してどっちかが良いとか悪いとかではなく、やっぱり役割が違うんじゃないかなというふうに思っています。なので、都市と地方の過剰な対立するような形を仕掛けたりとか、そういうような比較をすることを僕自身はあんまり好んではしません。

こちらが邑南町です。ちょっと見にくいと思うんですが、島根県石見地域です。大田市から南に下がっていって、川本町があって川本の先が邑南町です。その先は広島県の大朝町、北広島町というところに隣接している地域です。現在人口で言うと、11000人ちょっとのところです。邑南町の中心部は盆地になっています。ここが役場中心部の矢上地区です。邑南町は平成の大合併で、羽須美村・瑞穂町・石見町が合併して邑南町になりました。邑南町は「邑智の南」と書く、邑智郡の南というところで邑南町になったと思います。

人口動態ですが、こちらの資料は一昨年度まで島根県中山間地域センターにおられた藤山さんが研究された結果を借りていますけれども、先ほどの吉川先生のお話であったように、邑南町でも10代後半から20代ぐらいまでが一気に人口が減少しています。0.0のラインから下にグラフが下がっているのはその年代が下がっているという見方です。一番右奥が80～90代というところで、下に下がっています。これは自然減、亡くなっておられるという事です。邑南町の特徴としては、その間で30代～40代の男性女性がグラフ上向きになって

います。つまり生産年齢世代が地域に入っている。その影響で子どもたちも上向きになっている、というのがここ数年の動きです。

次に邑南町の産業構造です。これは「RESAS（リーサス）」から取ってきているのでまた見ていただければと思います。建設業・小売業・医療福祉・製造業というのが売上高としては大きいところを占めています。

そして、邑南町の政策の３つの柱と僕が勝手にそう思っているんですが、１つは「日本一の子育て村」構想という子育てしやすいまちづくりをやっています。そしてもう１つが「A 級グルメ」構想です、ご存知の方もおられるかと思います。「ajikura」という基幹店を柱として A 級グルメの街として、食材と食を売り出すという構想に取り組んでいます。３本目が、ここで具体的に紹介する「地区別戦略」があると僕は理解しています。

「地区別戦略」というのはどういうものか。平成27年度に邑南町は総合戦略を作りました。各市町村それぞれで、大田市なら大田市の総合戦略と人口ビジョンというものを作っていますが、邑南町も邑南町版の総合戦略と人口ビジョンを作っています。ただ邑南町が他の市町村と比べて大きく異なるところはこの「地区別戦略」です。どういうことかと言うと、他の町村の総合戦略はそれぞれの町村が業績計画あるいは企画の中で作るんですが、ここでは12の公民館単位で町が地域の方に自分たち独自の地区の独自のプランを作って下さいとなっています。27年度に12地区に作っていただき、これを28年度～31年度の４年間、行政も支援しながらいかに実現していくか、それを後押ししましょう、という事で取り組みがスタートして今年で３年目に入っているのです。

地区別戦略事業は、先ほど言ったようにエリアは公民館の単位になっています。組織としては、地域の合意形成が図ることができる組織として、自治会長さんが入っておられたり、社協さんが入っておられたり、体協さんが入っておられたり、農協さんや消防団が入っておられたり、地域の中の主要な既存組織、あるいは若手の青年部が入っていたりと、各年齢層が入っている組織がしっかり合意形成する場として位置づけて、そこが事業主体となる、そういった仕組みになっています。事業内容として、１つは人口減少に歯止めをかける事業、もう１つは交流人口の増加に寄与する事業。この２点を目的としてやってください、ということになっています。次のスライドで全地区を上げました。これは途中経過で、お手元の資料では割愛させてもらっていますが、要は全地区いろんな計画が上がっていて、内容も非常に多岐にわたっています。空き家の問題、土地の問題、エネルギーの問題、地域を支える仕組みづくりとしては小さな拠点づくりをどうしようかという問題もあります。ほかにも交流、観光、体制づくり、あとは産業とか子育てなど。こういった多岐にわたるものが各地区いろんな事業で上がっているという状況の中で、これらをいかに１つでも２つでも実現していくのかというのが課題となっているところです。

その課題をクリアするために邑南町では地域マネージャーと呼ばれる人材を配置している地区もありますし、そうでない地区もあります。地域マネージャーは、地区の事務局機能を回すことのできる人材のことで、地域に配置されているわけですが、こうした人がいる地区は曲がりなりにも動いているわけです。ですが、そこがいない場合は誰が事務局を回すのかという部分がどうしてもぽっかり開いてしまう。その部分を当初は私たち中間支援組織が地域の方と一緒になって、あるいは公民館と一緒になりながら、合意形成の進め方をサポートするなどのことをやってきました。

こうした形で丸２年間は動いています。その中で、全12地区で具体的な活動というのが多様に展開されていきました。お祭りをやっているところもあれば、交通の問題に取り込むところもあったり、買い物弱者対策としての移動販売を始めるところもある。健康づくり、十数年途絶えていた運動会を再開した地区もあります。他の地域で考えると、12地区あれば半分ぐらいはもしかしたら動くかもしれない、というのが実情ではないかと思

います。たとえば大田市で考えた時に、市内に27ヶ所まちづくりセンターがあるのですが、その27ヶ所がすべてこのような事業を「今からやれ」と言われてできるかといえば、なかなか難しいのではないかと思います。曲がりなりにも邑南町が全ての地区で何らかの動きが出ているというのは、すごく大きなことではないかと思っています。

こうした地域での動きの中で、法人化の事例が多く生まれてきています。銭宝地区、日貫地区、田所地区で具体的に検討が進んでいます。さらに、研修事業をやっていまして、法人化を進めていくための情報提供をしたり、空き家活用にはこういう事が必要ですよねというお話をしたりしています。他にも「小さな拠点」にもかかわっています。「小さな拠点」という言葉が一人歩きをし始めていて、ちょっとふわっとしすぎている。「小さな拠点」といっても何か施設整備をすれば良いのか、そもそも何なのかというところからよくわからないという点を、概念的に整理するようなお手伝いをしています。

法人化というのは組織とか体制という基盤です、人が動くための基盤づくりになります。さらに、空き家活用といった具体的なテーマは地域にとってのミッションや事業、経済事業も含めての中身を考える研修になります。小さな拠点は実は施設整備の話だけではなく、場や空間、あるいは仲間づくり、そうした関係性づくりになっていく。以上のような、法人化、具体的なテーマや課題に沿った研修、小さな拠点づくり、これらはそれぞれ個別でたまたま立てた活動の柱だったのですが、つながっていくところが多いということを感じながら２年間やってきました。

先ほど言ったように法人化の動きがありまして、地区別戦略が始まる前から邑南町では法人化が活発に取り組まれてきたのですが、地区別戦略が動いてからLLC合同会社ができたり一般社団法人ができたりと加速しています。さらにまた日貫・田所・銭宝という地区ではさらに法人を作っていこうという事になっています。

このスライドでは小さな拠点について示しています。基本的には仕組みづくり、先ほども言ったように関係性づくりだと思っています。施設を整備するなど、ハードをどうこうするという話ではないと思っています。このことについては今日突っ込んで話しはする時間はありませんが。

特に今日お伝えしたいのは日貫地区についてです。何をやっているかというと、日貫の地区別戦略として、生活部という単位で「川辺の学園」という保育所を空き家を活用して整備して無料化しようというプロジェクト、産業部ではイノシシ肉を使った加工品販売、観光部では地域にある大きな庄屋屋敷をなんとか活用していきたい、こうした活動を展開しています。その結果、現在具体的には、地域にあった空き家・古民家をゲストハウスにするというプロジェクトと、倉庫、かつて縫製工場だったところを宿のフロントとカフェを兼ねたような形の人が集まれる空間にしていこうという２つのプロジェクトを動かしています。

アルベルゴ・ディフーゾというイタリアで始まっている取り組みがあります。イタリアでも空き家がたくさん出始めている中で、それぞれの空き家を一つずつ何かをしようというのではなく、地域全体をホテルに見立てて、空き家がそれぞれ１つの宿泊の部屋、お土産屋さん、工房見学の場所といった形で、地域全体で宿泊や交流に取り組もうという考え方がアルベルゴ・ディフーゾです。アルベルゴ・ディフーゾの特徴について引用しています。一番良いのは、地元の老人がふらっと立ち寄るアルベルゴ・ディフーゾは、住民との連携がうまくいっている証、と書かれているのですが、本当はそういうような空間を日貫でも目指していきたいなと考えています。日貫にはたくさんの地域資源が分布しています。こうした地域資源を活用する体制として、「一般社団法人弥禮」があったり「活性協」という地域の合意形成をする場があったり、行政や公民館もありますので、こういったところでそれぞれ連携しながら取り組みを進めています。

時間も少なくなってきましたので、日貫地区

を通じて見える地方創生について、３つぐらいフェーズに整理したら良いのかなと思っています。１つは邑南町における地方創生の取り組みについていえば、地域が考えるということがまず第１段階にあったと思います。国の総合戦略があって島根県の総合戦略があって邑南町の総合戦略があります。通常ここでストップするのですが、それをさらに地区におろした。その時点では多分半強制的に、作ってください、という形になっていると思います。でもそのことで、地域がそれを受けて考える。考えて作った計画戦略をもとにフェーズ２として実際に動いていった。先ほど紹介したように、生活部、産業部、観光部という単位で実際に取り組みが始まっていきました。フェーズ３で、それらを動かしていく中で初めて繋がったり巻き込んだりしていける人材や組織というのが立ち上がっていきました。地域内では地域内組織もあるし、農家、法人あるいは保育所といったところと連動することができていく。地域内から空き家の所有者との繋がりもできる。さらには新規移住者も生まれてくるし、地域外からの協力者も出てくる。さらに大学とか大学生もそこに入ってきてもらうといった形で、多様なプレーヤーがその中で連携・協力していける、そういう場がつくることができると思っています。

成果としては、繰り返しになりますが全12地区が何かしら具体的な取り組みを展開したと、これが非常に大きいと思います。課題としては、まだまだ他人ごとから自分ごとへの転換が必要だという点です。地域全員が自分の事として捉えることは理想型としてはあっても現実としては起きえないと思っていますが、その輪をいかに広げるかというところが重要です。さらに、主力メンバーが固定されてしまう傾向があるので、新規の参加の輪を広げること、もう１つは法人化や経済事業への参入について、リスクをしっかり事前に把握したうえで取り組まないと、後々ちょっと怖いかなという課題があります。

最初に申し上げた通り、地域には必ずプレーヤーがいると思っています。農家さんもおられるし、大工さんもおられる、左官屋さんもおられる。公民館もある。地域にはそういう人たちがおられるのですが、一番いないのが下に書いてあるマネージャーです。合意形成をする、会議の進行、プロジェクト全体を長期にわたって進めていく、そうしたマネージャーの存在というのが非常に重要で、実は不可欠なのですが、こうした人材はどうしてもいない、あるいはいないわけではないけれど出てきにくい、というところがあります。そこでこれをいかに輩出し、育てていくかというのが非常に重要な地域課題だと思います。

地域をつくるということは、「共感の環」を広げていくということと、マネジメントできる人材をしっかり作って確保していくということに尽きるかなと思います。あとは、「軽いフットワーク」と書いてありますが、いかんせん条件不利地域でやっていることですので、考えすぎると、「やらない方がマシ」になってしまう。でもやらなければ何も変わらない訳ですね。なので、できるだけ考えすぎずに、とりあえず何かできることからやってみよう、という動きを作っていかないと何も変わらないかなと思っています。そういう軽いフットワーク、軽いノリというものも必要だなと考えています。そこをマネージャーが、具体的にどういうふうにしていくかという判断ができるような人が、そこにいることで、地域は動いていくのではないかと考えております。

駆け足になってしまいましたが、邑南町の地区別戦略を中心とした報告は以上で終わりたいと思います。ありがとうございました。

○福井

ありがとうございました。個別報告３つめになります。株式会社コミュニティ・ケア中澤ちひろさんにお願いしております。「看護で地域を元気に！幸せな人が溢れるまちづくり」というテーマでお話しいただきます。よろしくお願いいたします。

「看護で地域を元気に！幸せな人が溢れるまちづくり」

中澤ちひろ（株式会社 Community Care）

○中澤

こんにちは。株式会社コミュニティ・ケアの中澤ちひろと申します。私は、神奈川県出身のＩターン者です。４年前に私を含むUIターンの看護師３人で、訪問看護の事業を開始し、その後島根で結婚し、子どもも生まれ、今はすっかり島根県民となり暮らしています。今日はＩターンした者としての私の事例と、現在私たちの会社では「たくさんの幸せな人が溢れるまちづくり」というスローガンのもと地域課題を解決するための活動をしていますので、その活動について発表していきたいと思います。

私は神奈川県の相模原市に生まれて東京の大学を出て後、地元の神奈川県相模原市の病院で勤め、その後研修先として広島の病院で働きました。どちらかというと都会の方ではなく、人口が減少してきている県境の中山間地域の地域中核病院で看護師を続けてきました。そうした中で、地域医療の面白さも感じながら、同時に人材不足などの地域医療の現状にも課題意識を持ちました。

今の地域医療は、人生100年時代となって、病気になったら入院して病気が治ってから退院ではなく、病気と共に歩む時代、治し支える医療に変化してきました。そうした中で、私が中山間地域で出会った現状は、少子高齢化によって医療や介護を必要とする人はたくさんいるけれども、医師の高齢化も進み、クリニックが閉鎖していくなど地域の医療は縮小し、病院だけが頑張ったとしてもなかなかうまくいかないということでした。そうした体験を通して、地域医療を盛り上げていくためには、「若い人が働きに来ない」というところを変えていかないといけない、という思いを持ちました。そのためには、若い人が活躍できる環境があることや、退院した後に地域の中でも医療やケアを届けて、地域の中で支えることができるような病院以外での看護師が働く場所、家庭を持ちながらも働き続けられる働き方の実現、医療分野の人だけではなくて行政や地域住民・教育・経済など地域の中で、みんなで持続可能な地域社会の創造が必要だと思いました。

そんな時に雲南市で、「元気なうちから、住民と知り合って毎日が楽しい、心と体の健康と安心を住民と一緒に作る」というコミュニティナースという働き方をしている矢田明子さんと言う保健師さんに出会いました。全国で就業している看護師は160万人ぐらいの方がいます。その８割以上が病院やクリニックで働いています。予防的な関わりをする地域活動する看護師は行政保健師などを含め５％以下、さらに自宅に看護を届けるという訪問看護師は３％程度にとどまっています。まだまだ地域の中で住民の暮らしを支える看護師が少ないため、彼女の思いに共感し、地元と同じような中山間地域の雲南市で、地域の中で看護師として住民さんの暮らしを支えるための実践を積んでいこうと思い活動を始めました。

今、活動している島根県雲南市の概要ですが、人口は４万人弱です。面積は東京23区と匹敵するぐらいの大きさ。高齢化率は36.5%、年間500人から600人ずつ人口減をしている地域です。こういった高齢化の高い地域の中で、雲南市が地域づくりの土台となる戦略をうちたてているのが、「チャレンジの連鎖による地域づくり」です。平成16年の市町村合併の時に雲南市ができ、その翌年の平成17年から雲南市は地域自主組織という小規模多機能自治を作りまして、現在30地区あります。そうした地域課題を自ら解決していく組織を作り、「大人チャレンジ」という地域の大人たちのまちづくりへのチャレンジが先行していました。その中でなかなか次の担い手が現れないと

いう事で、「若者チャレンジ」というものが生まれました。そして今は小学校・中学校・高校生の「子どもチャレンジ」の方も走っています。こうしたチャレンジの連鎖による生態系が持続可能なまちづくりになっていくのではないか、という事でやっています。この若者チャレンジのところに、私たちがチャレンジしています。

また、若者チャレンジを後押しする仕組みとして、「幸雲南塾」というものが雲南市にはあります。これは地域のローカルチャレンジャーを生み出す塾という事で、若者の起業支援などを中間支援組織である「NPO 法人おっちラボ」が後押ししてくれています。そうした中で医療・福祉分野でも地域をフィールドに若者によるチャレンジが始まっていました。

いろんなチャレンジがありますが、例えば「まゆちゃんの宅配便」というものだと、塾生の方が独居高齢者のお家に行って、買い物支援と、健康情報を届けるという活動してみたりとか、様々な若者が地域に出てチャレンジをしていました。そうした先行チャレンジもあり、私もその幸雲南塾で UI ターンの看護師３人で地域の課題へチャレンジしました。私たちはそれぞれ広島だったり東京だったり神奈川だったり、県外の病院で働く中で、病院からなかなか帰りたくても帰れない人たちに出会う中で、地域に看護を届けるためにはどうしたら良いかという事をお互いに思っていました。それぞれが雲南市と出会い、幸雲南塾に入りました。

地域課題を発掘していくうちに雲南市は在宅医療の資源が少ないという事が明らかになってきました。少子高齢化によって開業医や訪問看護ステーションが人材不足になり、在宅医療の空白地帯というものができていました。しっかりと医療が公平に届き渡るような体制も作っていかなくては、という事が言われていました。

まずは医療の空白地帯に看護を届けようという事で看護師３人で訪問看護ステーションを立ち上げます。訪問看護というのは、病気の人にお医者さんの指示のもと看護師が自宅に訪問して医療やケアを届けるという仕組みです。ただこれだけでは、患者さんが安心して帰ってこれる地域になるかと言ったらそうではないので、「みんなでつくる幸せな人が溢れるまちづくり」というスローガンを元に、ケアをしあえる風土づくりができるよう、地域の人たちに積極的に会いに行く活動をしています。地域からのヒアリングを通して、現在３つの活動に取り組んでいます。まずは訪問看護で在宅医療を届けるという事と、若手の地域医療のネットワークを構築するという事、後は地域住民さんと一緒に健康なまちづくりを行うという三本柱の活動を行っています。

中山間地域の訪問看護は、一軒一軒お家が遠いので、訪問効率が悪いという課題があります。経営的に難しいので今まであったステーションも人材不足やサービス効率の悪さから閉鎖していったという過去の事例がありました。訪問看護師は全国の平均年齢が48歳ぐらいですが、東京の訪問看護ステーションからのノウハウ支援をいただいて、若手でも訪問看護ができるよう ICT を利用して情報共有を密にする体制づくりなど経営工夫も行いました。また、若手医療のネットワーク構築では、中山間地域は20代～30代の働く若者世代が流出しているので、施設や職種・地域を越えてお互いに若い人が繋がりあうようなネットワークづくりも行なっています。最初10人ぐらいで勉強・交流会を開くことから始まり、今では開催すると50～60人ぐらいの人が訪れるようになりました。また雲南市はキャリア教育にも力を入れていますので、高校や中学校に出張で講義に行く事もあり、若者に地域医療の魅力を知ってもらう活動も行っています。

地域住民さんと一緒に健康なまちづくりでは、住民さんの相談に乗り地域の支援を行なっています。現在、地域包括ケアという言葉を聞くと思いますが、地域でケアしあえる環境づくりの計画を立てて進めていきましょう、という事が言われています。地域の中には、どういうふうに方向性を定めていったら良いのかわからない、という方々もいて、一緒に地域自治組織さんと協働して、健

康なまちづくりのための調査や活動のお手伝いさせてもらっています。

実は、私たちの事業所がある建物は、地域の声から生まれた交流の場でもあります。事務所が位置している三刀屋地区は、昔は賑わっていた商店街ですが、シャッター商店街になり、家でテレビを見てあとは死ぬのを待つだけだわ、ということを聞いた地域自主組織さんが地域の中で拠点を作ろうとされており、一緒に空き家になった書店を活用し、地域の拠点をゼロから作っていきました。

三刀屋まちづくり協議会（地域自主組織）さんと、私たちの訪問看護ステーションコミケアと、A 型障害者就労支援事業所の三者でこの建物を使用し、「ほほ笑み」と名付けられました。１階の広間では、月に３回高齢者サロンを地域の人が開催しており、私たちも月に１回、そのサロンで健康相談や健康教室をしています。最初は高齢者サロンも参加者の方は受け身でしたが、回を重ねるごとに「今度は自分が何かやるわ」というように活発になって来ています。こうした地域の活動も地域住民さんといっしょに考えながら行っています。

今設立から３年が経ち、少しずつ地域の中で変化が見られて来ているなと実感しております。１つは訪問看護で在宅療養という選択肢ができた事です。中山間地域では自宅に医師が訪問することができない地域があり、そこで最期まで自宅で過ごしたいという方の思いを叶える事ができませんでした。今は、そうした地区でも医療機関と連携して在宅で看取る体制が整いつつあります。グラフは利用者さんの総数です。元々訪問看護がなくなっていった地域だったので、自宅で療養したいと思う人がどれだけいるか分かりませんでしたが、実際にサービスを開始すると、利用者の数も増えいき、みんなが必要としているサービスだという事が分かってきました。

また、サロン活動といった地域と関わるという活動を続けてきた事によって、他の施設の専門職の方や学生が地域活動に参画してくださるようになりました。写真は大学生が主導して開かれた口腔ケアのイベントです。地域での福祉の取り組みも世代を超えておきてきました。三刀屋地区の地域自主組織だけではなく、他の地域からも相談があり、「今まで健康づくりやってきたけれどどういうふうに進めれば良いか？」という事で一緒に調査を行って、方向性を見出すことができるよう支援したこともあります。そして、もう１つは、コミュニティナースという活動です。私たちは医師の指示のもと、自宅で看護ケアを提供する仕事をしていますが、コミュニティナースという形で誰もが相談できるよう暮らしの身近な場所に看護師を存在させようという事で取り組みが始まった地域もあります。

こうして最初３人から始まったチャレンジですが、何か活躍できたり、実際に自分が思っている事、地域の人に何かしたいという事を実現できる場所ができた事によって後に続いてくる人たちも出始めました。事業所には、最初は UI ターンの人たちが多かったのですが、今は県内に住んでいる方も働きに来ています。

３年間実践を続けてくる中でこれからの組織としての課題ですが、柔軟な働き方の実現し、キャリアや生活を築けるようにしていきたいです。やりたいという本人の思いを大切にし、地方だからできないではなく、地方の強みを活かしてキャリアが積め、新しさやワクワクも大切にしながら組織運営を行っていきたいと思っています。また、自分たちが地域に必要とされる組織に成長し、地域の方々と共に良い地域作りを行っていきたいと思っています。私たちは半分ぐらいは一応よそ者で、雲南市外から来た者なので、しっかりと地域の生態系に乗っかって馴染んでいき、地域がより豊かに住んでいる人が幸せを感じられるような地域づくりをしていきたいです。

こうした雲南市の地域医療、いろんな人が地域に携わって看護師たちが地域の外に出て活動するという事が行われてきた中で、年間100人ぐらい、全国から視察の方が来ています。どういう人たちが来るかと言うと、地域のために何かしたい

と思っている看護師だったり、地域の中で医療・介護がなかなかうまくいかないと感じている行政の方などが来られています。こういった取り組みが、地域の中でお互いにケアしあうという活動が促進する事が分かってきたので、2016年からコミュニティナース育成事業というものをスタートさせました。これは、地域に出て自分自身が地域ケアをどのように行っていけば良いのか、ということを学ぶスクールになります。講座自体は東京で行なっており、地域のために何かしたいとか、病気になる前から人々の健康や幸福に寄与したいという思いを持って、全国から看護師が集まっています。現在６期で100名の卒業生を排出しており、様々な形でコミュニティナースと呼ばれる地域で人々の健康や幸せに寄与する看護師たちが活動しています。またそういったコミュニティナースを受け入れたいという自治体からもお声がかかって、そう言った枠組みの調整なども支援させていただいています。

雲南市では地域専従のコミュニティナースが１名は一昨年から誕生していましたが、今年からさらに新しく２名が地域自主組織の波多地区という山間部にある地域と、中心市街地にある街中の新市地区というところに入りました。

他の地域では、例えば病院に勤めながら自分の空いた時間に地域へ出て活動をしていたり、地域おこし協力隊として地域に入っていくと言うスタイルの人たちもいます。雲南市の場合は、コミュニティナースの効果が地域に与えているものを検証して、それが持続可能な形にするにはどうしていくことが良いのかを一緒に作っていく予定です。そうしたチャレンジにガバメントクラウドファンディングとしてふるさと納税を利用し、資金を回す事ができないかなどの取り組みが始まっています。

こうして、地域の中でどうやったら地域が持続可能であり、ただ人口が増えるだけではなく、その人たちが幸せであるという地域を目指していけるか、看護師としてできる事をこれからも続けていきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

○福井

ありがとうございました。吉川先生の基調講演それから個別発表という形でお三方にご発表いただきました。ただ今から10分ぐらい休憩をいただきたいと思います。その間に第二部のパネルディスカッションの準備をさせていただきます。

パネルディスカッション：
住民の生活感覚と地域再生の現場から問う「地方創生」

コーディネーター：福井栄二郎（島根大学法文学部）
コメンテーター：片岡　佳美（島根大学法文学部）

○福井

ただいまから第二部という事で、先ほどご発表いただいた４名のご発表を踏まえてのパネルディスカッションをはじめたいと思います。時間次第ですが、私の希望といたしましてはフロアの方にもマイクを回したいと思っています。皆さんのなかにも地域で活躍されている方、あるいは地域と関わりながら何らかの形でお仕事されている方が

大勢いらっしゃると思いますので、ご意見とかご質問などがありましたらぜひご発言いただければと思います。

はじめに、今の発表を踏まえまして、法文学部の片岡先生の方から一言コメントを頂きたいと思います。よろしくお願いします。

○片岡

こんにちは。島根大学で社会学の教員をしています片岡です。今日のご講演とご報告を聞いたコメント、感想みたいなものをお話しさせていただきたいと思います。

今日は「地方創生」について考えるということですけれども、最初に関先生から説明がありましたように、それは、国が政府一体となって地方の人口減少とか超高齢化といった問題に取り込むというふうなことで始まったものでした。なぜそういう政策をやるのかというと、例えば、日本の経済がこれから不安だからとか、都市に人口が集中しすぎて生活しにくくなるからとか、あるいは日本の農業が廃れるからとかいうように、結局日本という国・まとまり、そういうふうな視点から地方創生とか地域再生というものを考えているような傾向を感じるのですよね。政治家の発言にあった、「やればできる」とか「頑張らないところはごめんなさいだ」というのは、国のため何かやれ、何もやらないなんて何ごとか、みたいな姿勢、ニュアンスさえ感じたりもします。

だから、今日のご講演とご報告で、少しほっとしたというか、勇気づけられたのです。というのは、実際の現場や地域では、そういう上からの、国のためにとか、そういった発想ではなく、そこに住んでいる人の視点から地方創生あるいは地域再生というようなことが考えられていると感じたからです。国とか中央とか、そういう都合や目線ではなくて、もっと地方に住んでいる、一人一人のたまたまそこに生きている生々しい人間、その人たちのことを重んじるということを、現場ではしっかりと地に足つけて考え実践されているんだなと思いました。まだまだそれは始まったばかりの取り組みかとは思いますが、そういう方向性も表れてきているんだなと思い、期待するとともに私も地方の人間の一人としてそういうところを考えていかなくちゃいけないなと思いました。

それぞれのお話について簡単に私なりの感想を述べさせていただきます。最後から遡っていきますが、中澤さんのご報告では、コミュニティナース、コミュニティ・ケアのお話がありました。コミュニティというのは普段から日常的に顔を見て触れ合う、そういう人たちの関係が成り立つところです。そういう、顔の見える関係、普段からそういったところでケアというものを実践されているということは、まさに一人一人の個別の人間、例えば「高齢者の皆さん」とか、「地域の皆さん」とかいったひとかたまりではなく、「吉川徹さん」とか「田中輝美さん」というように名前のついた一人の生々しい人間をじっと見つめて、顔を見ながらケアをするというようなことをやっておられるのだと非常に感銘を受けました。スライドにもありましたけれども、「その人らしく生きるを支えたい」というのは本当に大事だと思います。どんな人だってたまたまそこに生まれただけで、地方に生まれたいから生まれたって人はいませんし、あるいは逆に都会に生まれたいから都会に生まれたという人もいません。たまたまそこに生まれた人の人生をいかに充実して、最期、途中でもなんですけど、生きていて良かったなと思える人生をどういうふうに送っていけるか、というところが大きな課題だと思います。そのような視点から活動されているということに、本当に脱帽と言

いますか、勇気づけられるとともに尊敬しました。

そして白石さんの報告。最初は上からの言葉が、すなわち地方創生・地域再生ということがきっかけになって、自治体が動いて、というところがスタートだったのかもしれないですが、それを地域の住民一人一人が自分のものにしていったという事例として私は聞かせていただきました。自分の生活について、自分の地域での暮らしについて、自分が影響を及ぼすということの大切さ、上から決められたことをそのまま受け取ったり、それに振り回されたりするのではなく、自分たちのここでの暮らしというものに自分が影響力を及ぼすという……それは権利ですよね。自分の意思決定権みたいな話だと思います。そういうものをまもるためにこういうふうな活動・実践があるんだよ、という、そのようなお話として聞かせていただきました。

それから田中さんのご報告、吉川先生のご報告もそうなんですが、「関係人口」がテーマでした。これは私も今回、このお二方とお話することを通して勉強させてもらった新しい概念なんですけれども、これはそれこそ中澤さんのご報告の、顔の見える関係のケアというときの、「顔の見える」というのは何だろうという問題を提起されているのだと思いました。私たちはついついそこに住んでいる人たちというものを、日常から顔が見える人間関係・コミュニティというふうに思いがちなんですけれども、「関係人口」というのは「顔の見える関係」の定義を変えてもらったというような、そこが少し衝撃的と言いますか、非常に刺激的でした。人口というのは単に経済成長のためとか、農業を守るためとか、自然を守るためとか、あるいは今の高齢者の福祉を支えるためにとか、もちろんそうでもあるんですけれども、それだけではなくて、先ほどから言っているように一人一人の住民の生活を思う、ケアをする―ケアというのはお世話する・介護するだけではなくて、思いやるとかいうこともケアだと思うんですけど―そういうことのための人口の議論もあるんですよね。人口というのはそういう視点からも捉えられるんだということを教えていただきました。考え方の、発想の転換と言いますか、そういったことはこれからもっと盛んに議論されたら良いなと思いました。

ですから、地域再生とか地方創生とかそういったようなことが話題になっていますが、やっぱり原点はそこに人がいるということですよね。その人のために、という視点が大事ですね。しかもその人には個別に名前があり顔もあり、色々な家族があり友だちもあり、色々なそういうものがある人たちなのです。そういう人たちの視点から考えるということ、それに立脚してもっと話が盛り上がって新しい方向に進んでいけば良いなと思って聞かせていただきました。

ただ、「ここで暮らしている一人一人」を重視すると言っても、今日のお話ではどちらかというと「ここで暮らしている一人一人の大人」がメインだったのかなとも思います。ローカル・トラックは子どもと言いますか、18歳とか、そういう若年層も含まれる話ですけれど、白石さんのご報告にあったような地域の活動にしても、コミュニティ・ケアの実践者としても、それの受け手というのは大人の方が多かったのかなと思います。関係人口も大人と言いますか、成人になってUターンとかIターンとかいろんな形でもって出てきた人たちだなと思いました。だから、ぜひ子どもも含めた視点でも考えられたら良いなと思います。「一人一人の人間として」とか、意思決定権とか言うときには、すぐ自分の考えを持って自分で行動できる大人を想定しがちです。子どもというのは、大人に振り回されると言ったらなんですけれども、ついついそういった立場に追いやられやすい立場なので、子どもの主体性とか、子どもの一人一人のケアとか一人一人に寄り添った支援というものはどういうものだろうということも、ぜひ考えてみたいものです。もし可能であれば、中澤さんは現在子育て中ということもありますので、その点について何かお話を聞けたら良いな、と思います。

○福井

ありがとうございます。今のコメントを踏まえて、中澤さんの方から何か再コメントがありましたらお願いします。

○中澤

子どもの視点でいえば、雲南市はキャリア教育も行っているんですけれども、なかなか中高生時代に人生のキャリアモデルと出会えないという事が課題になっていて、そうしたしっかりと地域の中でキャリアモデルに出会ったりとか、よそに行ってキャリアモデルに出会うという事を支援したりしています。そうした中でも私たちも中学生・高校生に出会うんですけれども、そうした後ろ姿を見る事によって本当に進学に決めた子だったりとか、「雲南市で働きたい」と言って声をかけて定期的に関わってくれる子も出てきています。

もうちょっと下がって言うとですね、やはり地域の中で安心して子育てできるというのはすごく大事なんですけれども、核家族化が進むとなかなかそういった、昔は大勢で見ていたけどそれが担えなくなってくるという現状も、雲南市の中でも出てきています。そうした中でやっぱり地域共生社会という形で、高齢者と子どもたちの交流とかも今後できたら良いなと思っています。

○福井

中澤さん、先ほどのご発表の中で、雲南市で行っている「チャレンジ」というものがありましたよね。その中で若者チャレンジの他に子どものチャレンジがあるということでしたが、具体的には子どもさんが企画を出すんですか？それとも子どものためのチャレンジなんですか？

○中澤

子どものチャレンジ、という形で、それぞれマイプランを持ってやったりとか、ちょっと私も専門ではないのであまり詳しい内容は知らないんですけれども、小・中・高とキャリア教育の一環としてそういうものがあったりとか。この間は高校生が事務所に来てくださって、自分たちの研究で訪問看護の大切さをどうやって高齢者の人に伝えれば良いか研究しています、という事で話を聞いてくださったりしているので、そういった地域の中で課題を見つけてそれをどうすれば良いかという事を考える、という事を高校でもやっていますね。

○福井

そういった問題自体を大人だけではなくて中学生・高校生の段階から地元の課題・地域の課題というものを考えていくわけですね。

吉川先生どうでしょうか。ご発表の中では「高校生」「18歳」というのが吉川先生のご研究のポイントだったと思うんですけども、今、片岡先生の方から話がありましたその年齢以下のところで何かお気づきの点はございますか？

○吉川

そうですね。やはり18歳で、島根県で生まれ育った人たちは大きな岐路に立つという事があるわけですね。もちろんそれまでに島根県を愛する気持ちをどれだけ持つかということが大事なんですけれども、それと同時に島根県が激流の中で若者を流出させる構造にあるという、自分の置かれた位置というのを小・中・高でしっかり理解させる教育をしないと。多分、この（会場の）中で、私だけが島根県からの流出都市定住者になるはずなんです。だけど子どもたちから見ると、流出都市定住者がたった一人なんてありえないんですよ。つまり、子どもたちの人生では、実際は４割ぐらいの可能性で私と同じように島根県と関わる人になる人が出るわけです。

うちも中学生の子どもがいるんですけど、うちの子なんかと比べると島根県から出てきた人たちは断然強いんですよ。なぜかと言うと、大阪で住んでいる子どもには、選べる人生のオプションとして、偏差値の高い低いとか理系文系とか、あらゆるものが自宅から通える範囲内にあるんです。仕事や進学先についてもそうですね。そういう中

から自分で好きに選んで行くという人生と、島根県からの流出の人生とは明らかに違うわけです。

島根県がやらなければならない事、そしてやってきた事として、若い人たちにしっかり人生のビジョンを作ってもらう。そうすると子どもたちがちゃんと生きていくことができる。

都市に流出した島根県出身者が帰ってこないのには、じつは理由があります。大阪で育ったうちの子たちよりも、島根県から来た子の方が人材として魅力的なんですよ。分かりますよね？　そういう事があるわけです。それが、島根県がうまくやっている点だと私は思います。話を混ぜ返すようですけれども、そうした人材育成の点で島根県の学校教育は、魅力化以前から十分魅力的だったというふうに私は見たいんですけれども、他の方はどう思いますか。

○白石

お二人の話を聞きながら自分の中で思い出した事が１つあったのは、ロールモデルが少ないというのは本当に僕もすごく感じている事で、大田市で生まれ育って島根大学に入って、大学の３年生ぐらいまで全然自分がどう働くのかとか、これからどう生きていくのか全く見えなかったんです。周りに大人は山ほどいるんですけど、どう働きたいのか、真似したくなる働き方をしている大人というのが、僕の周りにはその時点では見えていなかったので、そのロールモデルの少なさはすごく課題と言うか、もっといろんな働き方をしている大人、自由に生きている大人たちを知ってもらいたいということを考えました。

もう１点、核家族について。Ｉターンでこれから入って来られる世帯が子どもを地域で産みました、でも旦那さんか奥さんが地域の出身であれば、近隣に実家があったり地域のなかに顔見知りがいて、育てやすさは少し担保されます。しかし、全く縁の無いところへ入ってきた夫婦が子どもを産み育てる中で、地域の中に顔見知りがいない。最近は土日が必ず休める職場環境でもないとなると、平日は保育所に預けられます、土曜日も土曜保育があります、でも日曜日どうしようという事態があります。先ほどの地区別戦略の話をする中でも、お母さんたちの話を聞くと「日曜日どうしても見て欲しいんだけど、それを地区別戦略でやってくれないかな」という話もやはりあります。

ですので、その辺の小さな子たちが育つ上での大人たちの見守る目とか、そういう仕組みというものはやはりいるのだろうな、と感じました。

○福井

ありがとうございます。今、子育ての話などが出たのですが、吉川先生のご発表の中で30代・40代になってこっちに戻ってくる枠組みを用意すべきなのだ、というお話がありました。この30代・40代というのはまさに子育てをしている最中の方たちだと思うんです。20代で大学出て就職するときは、大阪でも良いだろう東京でも良いだろう、となりますが、30代・40代になった時にじゃあ地元の島根に帰って来られるかというと難しい。そうしたＵターン枠を用意するという取り組みは、他の都道府県などで実際行われている事なのでしょうか？

○吉川

他の府県でもそれをやっているところは無いですね。島根でやっていない事を他の府県が先駆けてやっているということは、まずありえないです。うちが必ず先にやるんです！

私がお話ししたのは、今ロールモデルという話が出ましたけど、個別に一人ずつ、三々五々と、県にＵターンで帰ってくるという形だと、誰がいつ帰ってきているのかというロールが県民に見えないんですよね。それともうひとつ言いたいのは、例えば東京の大手町で外資系の企業でトレーディングをやっているエース級の人が、家庭の事情も色々考たりとか、故郷への思いのために『松江に帰ろう』と思った時に、自分を納得させる椅子というものがどうしても必要だということです。この時に田中さんが本の中などで言っているような「都落ち」というような言い方になった

り、ダウンシフトだというふうに周りからも自分からも思うのではなくて、県が自分を求めている、そして県がちゃんと私を処遇してくれる箱があるんだよ、皆が知っているあの箱に私が入るんだよというふうに伝えてあげる事です。

そして20代で、もうちょっと東京でやりたいなと思っている人にとって、『あそこに箱がある、30代になったらあの箱に入るかどうかを考えるんだ』という見方で、島根県のことを振り返るチャンスを与えてあげることは、とても有効というかある意味で重要だと思うんですね。

今島根県がやっている事というのは、本当に個別の地域に密着した、その地域が必要としている人材に全国から来ていただいて、と言う事ですね。これはこれで重要だと思うんです。そして、これは成功しているんですけれども、私が言っているのは、全体のバランスを取るためにむしろエリートとか企画者みたいな、しっかりした箱を作って、そこに人材をプールと言うか、引き戻すということが必要だろうという話なんです。

○福井

ありがとうございます。もうキーワード的なものはたくさん出たと思います。人口の話も出ました、関係人口の話も出ました、子育ての話も。

いろいろ出たので、そろそろフロアの方にお話を振っても良いのかなと思います。今日のテーマにご興味持っておられる方、ご研究をされておられる方、いらっしゃると思うんですけども、質問・コメント等何かありましたらお願いいたします。

○参加者

私は瑞穂町に５～６年住んだ事があるので、邑南町についての報告で、知った地名がたくさん出てきて懐かしく思いながら聞きました。邑南町になる前に、瑞穂町が社会教育にかなり熱心で、若手の有望株の正職員をあえてそれぞれの公民館に一人ずつ割り当てて、地域づくりのコーディネーター役、ファシリテーター役をずっとやってきたということを聞いたことがあって、合併時にも岩美町と羽須美村の公民館に職員を貼り付けていたと聞いています。普通は合併すると水準の低いほうに合わせるんですが、社会教育に関しては高きに合わせた、なかなか良い事だなと思っていたんですが、そういう土壌があってああいう地域ごとの計画というのができたんじゃないかなと思うのですが、白石さんが実際に入ってどのように感じていらっしゃるか、お聞かせください。

○白石

ありがとうございます。僕自身が入ったのは本当にここ数年なので、合併してから数年経ってからなんですが、やはりよく瑞穂町の公民館活動は非常に活発で良かったという話を聞いていますし、それが合併して全町に広がったのはすごく良かったというお話を聞いています。地区別戦略は上から、要は町から地域に対して作ってねという話があって、曲がりなりにも12地区が作れたのは、やはり公民館のそこのコーディネート能力というのがきっと発揮されたのだろうなと、詳しく聞いてはおりませんが、そのように感じています。

ただ邑南町の地区別戦略は、12の公民館区単位というエリアとしての範域であっても、公民館が主体になる戦略事業ではない、つまり、公民館区単位と呼んでいることで生まれる難しさがあります。地域によっては、地域の方が何となく「あれは公民館が事務局やってくれるんだ」というような認識で思われているところは、公民館の正規職員の主事さんが結構抱えてしまう地区が出ています。一方で、趣旨を理解して自分たちで組織を作って自分たちの組織でしっかり事業を回していく、事務局も回す、というところもあって、そこのノウハウのグラデーションは色々あります。今僕たちがやりかけているのは、その公民館主事さんたちにかかっている負担を少しずつ地域運営組織の方に引き戻す、渡していくという段取りやコーディネートをしているところです。というのは公民館の主事さんは多分やればできるはずなんですが、やりすぎると地域はまた公民館頼みになってしまう。そこを地域に引き戻す、公民館頼

みだと、主事さんが異動で変わることがある以上、そこに頼りすぎるのは良くないと思っています。

○参加者

ありがとうございました。公民館は社会教育の拠点といわれていますが、広島では公民館に正規の職員がいなくなるなど、全体として社会教育力が落ちてきている中で、地方創生としてアイディアを出して、みんなで一緒にやろうという事がなかなか難しい状況になっている、島根以外のところではこれが現実ではないかという気がしました。

○福井

次の方どうぞ。時間も限られていますのでできるだけ手短にお願いいたします。

○参加者

私自身は岡山県の倉敷市出身で、20歳頃に東京へ出て20年くらい東京に住んで、それから長崎に５年、岡山に戻って５年ぐらい、そのあと派遣で転々として島根に来て、島根で８年間仕事してきました。要するに島根にとって私は風の人だと思うんです。風の人として島根に来て、一番仕事しやすいという判断で島根に来させていただいた。医療系の資格があるので、そういう人材も少ないしその点ではお互いにニーズが合っているはずだと思っていました。本当は３～４年でうまく軌道に乗れば後の人材に任せて島根を出るということを当初は描いていましたが、地域の問題とぶつかって最後の３年間ぐらいはどうにもならないというところまできて、仕事を続ける意欲を失っていまして、いまは大阪の方に仕事を探したりしています。

つまり、吉川さんの話はよく分かるんですが、最後のところでおっしゃった失敗事例という、地域社会でやっていくことが難しい、ということは私にとっては非常に実感しています。それに対して自分が倉敷から東京に出て行ったことによって、自分は能力などを引き出してもらえたなどの、出会いもあった。どこが違うのかというと、多様性への許容があるかどうか。その点で島根愛、これが過剰になると、私のような外から来た人間にとっては少し厳しいかな、と思うのです。

それからもう一点、吉川さんは大阪から島根というものを見ていて、そこに島根愛はあると思うのです。当然私にも倉敷愛があって、倉敷がどんどん発展していく、チボリ公園が出来た、大学が移転してきた、と外から見ていると誇らしく思っていたのが、地元に戻ってみると必ずしもそうではなく、そこに人の利害やら何やらがあって、そこの関係性にうまく自分が適応できない、という事もありました。つまり、地域創生というのはすごく良く理解できる一方で、今でも島根を出ない人たちのなかには、むしろ逆に地域の中で孤立した人たちで、地域を出て行くことに躊躇もある。

つまり成功事例だけでなく、そこで潰れたり、外に出たり、嫌になったり、そういう失敗事例もあるということを認識しなければと思っています。

○吉川

ありがとうございます。非常に重要なご指摘だったと思います。中には私が何を伝えたいのかよく分からないと思われた方もおられると思うんですけど、今日私が伝えたかった事というのは、ポジティブな光の面と、ネガティブな影の面とが常に何事にもあるという事なんですね。島根県出身の人たちだけで閉鎖していたのでは、島根県は成り立たないとなると、今のご意見にあったような事が起きます。だけど逆に島根県がどんどんダイバーシティをもとうということで、例えば魅力化校の生徒さんが７割・８割まで県外の人たちだというようになってしまうと、その場合に失われるものもある。プラスの面とマイナスの面が常についてくるんです。島根県は難しい立ち位置にいるので、そのバランスの危ういところを歩いているんだということを、これをリテラシーというふうに言いますけれども、県民全員が自覚しておくという事が、月並みな結果になりますけれども、大前提であるかと思います。ですから、諸手を上げてこっちの方針で進めば良い、という事を私は

申し上げません。今のようなご意見は、非常に貴重なご意見だと思います。

○参加者

島根大学で大学教育の研究をしていまして、お話を伺って感じたことを、端的に述べますと、地方創生において大学や学校が果たすべき役割は何なのか、もっと言えば大学や学校が果たせない部分は一体何なのか、というのをお尋ねしたいと思います。今日ご報告いただいたお三方、事例をご報告いただいた方は新しいロールモデルをご提示されていたと思います。吉川先生のご講演を聞きますと、おそらくもう大卒の人材を受け入れるパイがもうこれ以上島根県の中にはない中で、そこをどうにかしていくためには新しい職業モデルを作っていかないといけない、そういった時代がこれから来ると思うんですが、その時に果たして大学や学校が地方創生で果たすべき役割は何なのかという点と、もう１つ、ぜひ島根大学が果たすべき役割、そして果たすべき機能というものをご意見として伺えればと思います。よろしくお願いします。

○吉川

ありがとうございます。非常に重要な問いであると思います。本当に外にいる人間がこういう事を言うのは非常にはばかられるんですけれども、やはり県にある小学校中学校から、ずっと行って介護施設まであらゆるものが、県の再生、どんどん豊かになっていく事に向かってないといかん、と思うんですね。その中で今の島根県の実情に合った初等教育、中等教育が展開されているところで、島根大学は島根県にちょうどベストフィットな動きをしているのかと言うと、私から見ると他の国立大学法人と足並みを揃えた動きはしているのですが、ここの県の個別の事情に対応した教育機関だというふうにはちょっと見えないんですね。

『この県の労働力需要に合わせた人を作るんだ』という方針が明確にあらわれる部局構成になっていて、そういう人を実際に作っているのならば、歩留まりという言い方は何なんですけれども、島根県の方から島根大学を卒業した方が欲しいという声が出てきます。そうなると島根大学と島根県の労働市場の連携が出来上がると思うんですけど。

じゃあ県に何が足りないのか、そして島根大学がどう進めば良いのかという事については、すみません勉強不足でわからないんですが、今の数字から言うと、そこのマッチングをもうちょっと調整できるのではないかというふうに見えます。島根大学は島根県からたくさんの18才を受け入れている、でもその人たちを育てて地域創生に生かすというマッチングがうまくいってないんですね。卒業後、島根県に送り出すというところをどうするのかということです。これは県立大学も同じ課題を持っていると思うんですけれども、そういう印象を持っています。

○福井

ありがとうございます。フロアの中には島根大学の先生方もいらっしゃいます。よく「入口」「出口」という言い方をしますけれども、高校との連携、それから卒業後の就職先企業との関係ということを考えれば、本当に島根大学は今難しいところに立たされています。吉川先生のおっしゃった通りだと思うんですけれども、何かビジョンを持ってらっしゃる方がいらっしゃれば、お聞かせいただければと思います。

○参加者

島根大学の教員です。島根大学には島根県内からはあまり学生が来ない。教育学部がある地方大学の割には県内から来ません。おそらくそれは、親御さんや高校の先生方が、先ほど吉川先生が旧島根方式と言われていたものが効いていると思います。それはそれで決して間違っているとは思いませんが。

大学に入ってきた段階から学生の皆さん何をしたいかということが分かっているかというと、必ずしもそうではない。大学にいる間に何か見つか

るだろうと思っている間に３年生・４年生となって就職してしまう。つまり、課題として、地域にどんな企業があるのかとか、行政は何をしているのか、それをそんなに知らないまま皆さん就職していくわけです。そうなるとおそらく大学入ってからでは少し遅いんです。今日の話の中で、小・中・高とつないでいくことが大事だと言われていたので、そこは連携して島根にはこんな課題があって、それを自分たちはどうするんだという思いがないと、島根がたんに好きですと言うだけではなかなかその先につながっていかないのではないかなと。それをもう一度考え直さないといけないない、そこに大学の機能があるんだと思います。そこでは、新しいロールモデルも必要でしょう。特に今、時代の変化が激しく、AI、ビッグデータ、大企業の不祥事の一方で新しいベンチャーが出来ている。大学もこうした変化に対応しなければいけないわけです。

地域での生き方については、皆さん同じことを違う切り口でおっしゃっているのかと思うのですが、田中さんは観光案内所ではなく関係案内所が必要とおっしゃいました。白石さんは地域のリーダー＝マネージャーが必要だと。今まで通りにやりたいけれど、それではうまくいかない時代にこれから入っていく、そこで引っ張っていけるような人材を育てないと駄目なんじゃないかなと思います。そういう意味では、大学の一番大事な役割は、こうした社会の変化にちゃんと目を向けるような視野や、チャレンジ精神を組み合わせることが大事です。こうした点を地域の人にちゃんと分かってもらって、安心して島大に来てくださいと言わないといけないと思うのですが、そこはまだまだできていないというのが我々の反省で、これから取り組まねばならないと考えています。すみません話が長くなりました。

○福井

貴重なご意見ありがとうございました。白石さん、何かコメントがありましたらどうぞ。

○白石

何度もすみません。お話を聞きながら、大学に求める役割と言うかどんな事をして欲しいかなという事をずっと考えていたんです。現時点でやはり思うのは、単発ではなくって、学生が入るにしても研究室が入るにしてもサークルが入るにしても、単発で一回来て、何かを学んだ気になって終わりではなくて、やはり継続して関わっていただく事が地域にとっても重要な事です。地域は迎え入れる以上はそれなりに準備します。昼食を用意するとか、夕食を用意するとか、あるいは交流会も企画していく、みたいな事も含めて、期待していろんな人が動きます。でもそれが単発で終わるとそこで終わってしまうんです。「あぁ大学生が来てよかったね」で終了してしまう。でも、それがまた１月後、２月後、あるいは四半期に一回ぐらい来てくれる、来年もまた来る、そのような流れを地域が受け入れる体制も含めて作って行けると、そこに対応する力がつきます。地域の方もトレーニングされるし、学生の方も１年生から入ってくれば１年・２年・３年・４年といろんな地域を、同じ地域でも、地域が変わったとしても、島根県の中山間あるいは離島、都市部のそれぞれの地域の特性とか課題とか、人の生き方・暮らし方というのが蓄積されていって、色んな人と出会うんじゃないかなと思うと、単発で終わる事を避けるように、中長期で関わっていただけるとすごく、地域としては良いのではないかなと思います。

○片岡

今のお話を聞きながら、私どもも「社会学実習」のフィールドワークで、島根県内の色々な地域にお邪魔してインタビューしたり、そういうことを授業の一環としてやっているんですけれども、反省します。行ったきり、行ったままになってしまっているんですよね。

私どもの社会学研究室だけではなくて、大学では今、キャンパスを出てフィールドワークだとか、地域で何かを学ぶということに色々と力を入れているんですけど、見て終わりとか、行って終

わりになっていないか、そこで関係人口というものの育成にちゃんと繋がっているかという視点ですね、そういったことをふり返って考えないといけないなと思って聞かせていただきました。

○中澤

すみません私からも。自分が学生だった時に何が一番楽しかったかなというのをずっと考えていまして。今まで新しいロールモデルと先ほどおっしゃっていたんですけれども、これから社会情勢が変わっていく中で、やはりその人々の生き方というものもすごく変わってくる。その中で、今までのように都会が良いとか、都会だと安心というような社会ではなくなってくるという時に、地域で課題ばかり出されると、どうしても、なんだかそれが重荷になっていくという事が起きます。雲南市でも行っている取り組みで、「いいとこ発見」というものがあるんですけれども、課題として提示するのではなくて、じゃあ課題があったからそれが何が出来るのかとか、もっと何かキラキラワクワクみたいな、学生さんたちが楽しんでそれを挑戦できるみたいな事を一緒に大学と共同して地域開発みたいな事を進めていく事ができれば。日本の約７割がそういった地方なので、地方こそ最先端だというところでぜひ、マイナスのイメージではなくみんなで面白く楽しく未来を描いていけたらなと思いました。

○福井

そういった視点は、先ほど田中さんが東京でされていた「しまコトアカデミー」のようなところにも繋がって来ると思いますね。田中さんどうでしょう、地方の面白さみたいなものをどういうふうに伝えていくかというところをお聞かせいただきたいのですが。

○田中

そうですね、今日は随分と心を揺さぶられたと言うか、とても考える事が多かったです。

私がなぜローカルジャーナリストになって活動しているのかの１つが、先ほど片岡先生もおっしゃっていましたが、人は生まれるところを選べないんです。たまたま地方で生まれたから劣等感を持つとか都会の方が上で地方が下というような感覚、私もかつては経験しましたが、そういう社会は嫌だなと。大きく言うとそれを変えたいという気持ちなんです。生き方として「そんな事はないぞ。地方だって面白いしチャレンジができるよ」と示したい。私はＵターンですが、社会人として育ててもらったのは山陰中央新報であり島根です。島根でなかったらこういう新しいチャレンジも生き方もできていないし、そこを自分の生き方として体現するしかないと思って、山陰中央新報という大好きな会社を辞めて独立して活動しています。

地域づくりで有名な海士町では「ふるさと」の替え歌を歌います。もともとは「志を果たし『て』帰らん」という歌詞ですが、海士町では「志を果たし『に』帰らん」と歌います。明治期以降、立身出世というのは、都会の良い大学に行って海外を視野に活躍するというその一直線しかなかったように思います。そうではなくて、新しい立身出世の物語、と言うと言葉が変ですが、海士町の替え歌のような志の果たし方もある。今日の皆さんが新しいロールモデルと言っているのと多分一緒だと思っています。

もちろん先のような立身出世もあっても良くて否定しているわけではありませんが、そうではない地方だからこそできる、中央集権ではない立志出世の新しい選択肢もあることを伝えていきたいと思いました。今日の皆さんが言っているような、地方だからできる事がいっぱいある、都会に向かう一本道しかなかったところに、そうではない新しい生き方の選択肢を地方発で見せていくという事が、色々な事を変える１つのきっかけになるのかな、というふうに思いました。

○福井

ありがとうございます。

もうそろそろ時間が来ています。今日、私自身

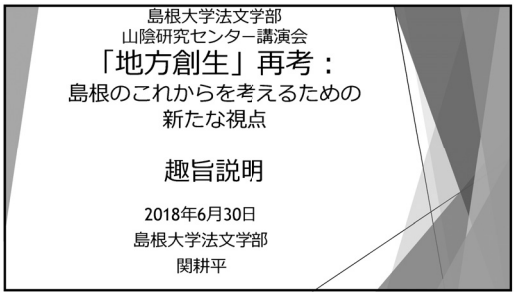
が嬉しかったのは、実は若い方が多く来ていただいているという事なんですね。大学生の方もいらっしゃいますし、パッと見たところ高校生とお見受けされる方もいらっしゃいます。ありがとうございます。

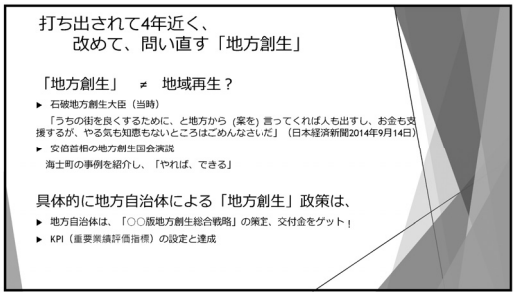
ここで今日出された課題というのは、おそらく今日明日で片付く事ではなく、申し訳ないですけど若い世代の皆さんに引き継ぐ事になると思います。ですので、若い方へいかに私たちがパスしていくか、そして若い人たちがいかに自分事として捉えて、解決して、また良いふうに展開していっていただければと思っております。そういった意味で島根大学も何かお役に立てる事があろうかと思いながら、こういうシンポジウムをこれからもさせていただく事と思います。市民の皆様にはこれからも色々とご指導ご鞭撻をまたいただきたいと思いますので、また今後ともよろしくお願いいたします。

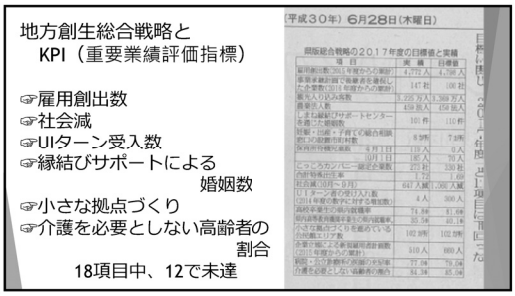
最後になりますけれども、今日ご登壇いただいた４人の方にもう一度拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

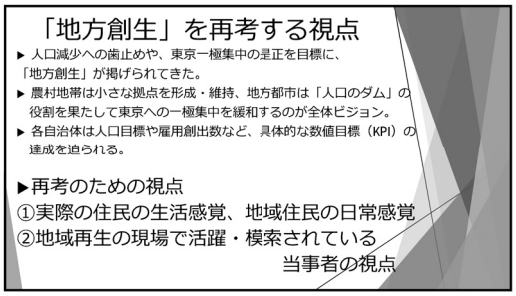
（拍手）

関連資料









【基調講演】

島根県のローカル・トラックと関係人口

吉川　徹
大阪大学大学院　人間科学研究科

1

過疎先進県　島根

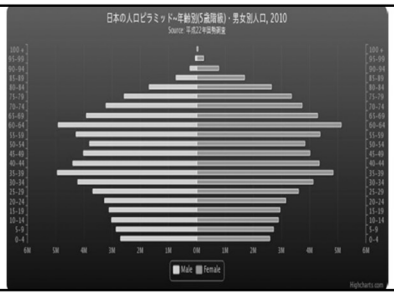
- 県人口、ずいぶん減って　68万4千人！
  - 年間約5千人の減少が継続
  - しかも、生産年齢人口(16～65歳)が少ない
- 「島根県人口ビジョン」（政策企画監室）
  - 高校魅力化プロジェクト
  - ふるさと島根定住財団のUIターン促進活動
  - しまコトアカデミー(田中　2017)　ほか

2

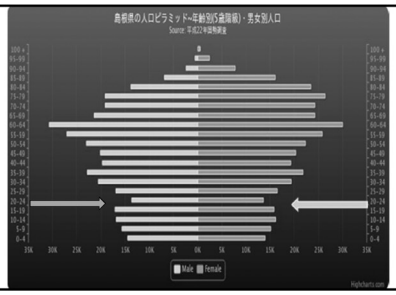
人口減少の内訳

- 人口自然減　年間4千人!
- 多くの後期高齢者が亡くなられる
- 島根県の「出生率」は全国トップクラス!（1.72）
  - 沖縄、宮崎に次いで3位！(全国平均1.43)
  - 現役世代の女性は、順調に赤ちゃんを産んでいる
- 高齢化先進県では致し方ない動向　若返りも
- 問題は人口社会減　年間約1千人　+α

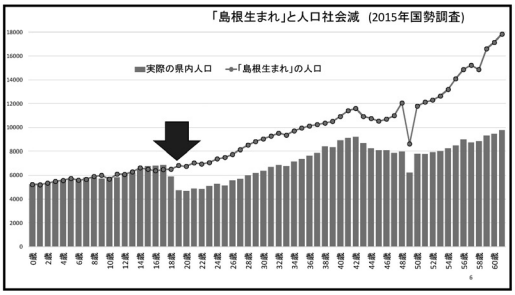
3



4



5



6

人口社会減を分解する

- 大卒／非大卒の分断　　流出、Uターン、Iターンという経路

	非大卒層 (中卒・高卒・専門学校卒)	大卒層(短大～大学院)
学齢期	魅力化16校への「しまね留学」(後述)	
高卒時	県外就職	県外へ進学／県外から進学
20代前半	**Uターン**	Uターン就職・若年の協力隊
30代以降	UIターン流入　と　短期滞在・再流出(風の人)	

7

非大卒層の人口移動

- 島根の18歳人口6000人で、大学進学率約46%
- 非大学進学者3200人
  - 専門学校1400人(ほぼ県外)、県外就職700人、県内就職1100人
  - 20歳前後、ほぼ6割にあたる2000人が県内の労働力になる。1200人の流出社会減
- ？　人の県外からの流入労働力。

8

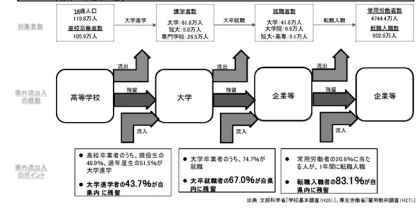
大卒層の人生経路は複雑な「急流」

- 『学歴社会のローカル・トラック　地方からの大学進学』 吉川徹　2001年
  - 1993年の横田高校からの大学進学者の聞き取り調査研究
  - それぞれの地方に、固有の若年人口の流出のパターンがある
  - それぞれの「流域」に、それぞれの人口流量調整の方策がある
  - 県立高校が、くまなく大学進学体制をとっていた旧・島根方式
  - 島根県の大学進学者の移動パターン分け
    - ①都市流出、②Uターン(Jターン)、③県内周流

9

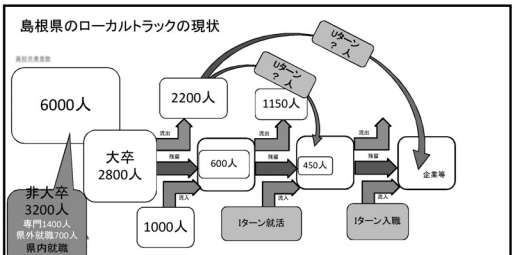
人口の県外流出入の大要(全国動向)

- 「大学進学」「大卒就職」「転職入職」のうち、県外流出の割合が最も高いのは「大学進学」時
  - 半数以上が地縁に進学



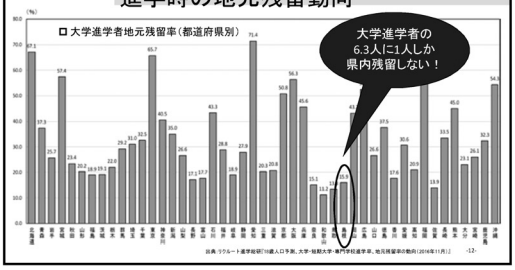
-10-

島根県のローカルトラックの現状

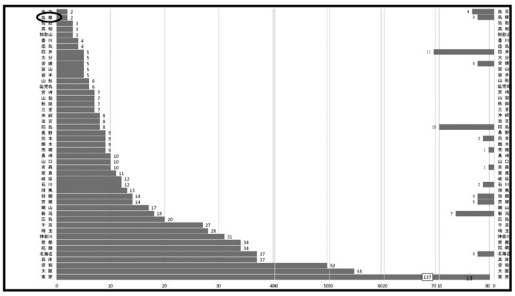


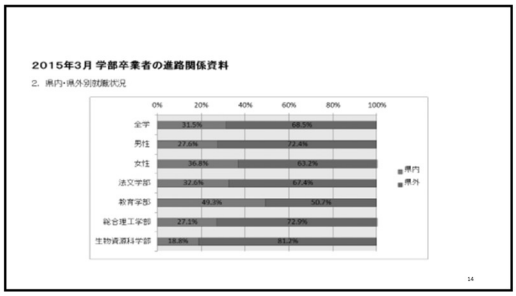
-11-

進学時の地元残留動向



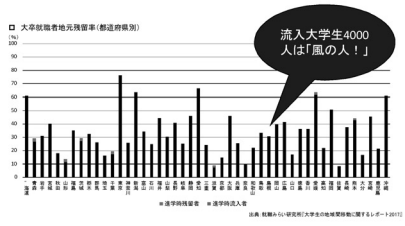
-12-





14

就職時の地元残留動向



-15-

若年期流出のローカル・トラック　まとめ

- 非進学者：　約1200人を県外に流出
  - 県内には2000人が残留
- 大学進学者：　　約2200人を県外に流出
  - 県内には600人が残留
- 島大生は「風の人」
- <u>大学進学率を下げて30%位にすると、人材の需要と供給が一致して、人口社会減は解決？！</u>

16

新・島根方式 高校魅力化プロジェクト
その光と影

- 平成30年度　178名の県外生徒受け入れ
- 学校コーディネーターによる教育の魅力化
- 過疎地の学校の生徒数を確保、学校存続へ

- なけなしの県費をかける費用対効果を冷静に
  - 3年間の若い「風の人」受け入れ・・・　島大と同じ？
  - 魅力化推進により　→　学力と進学実績停滞
  - 「大卒層は多くは要らない」という勇気ある決断か？

17

UIターンによる社会増の取り組み

- 社会人の関係人口を増やし、取り込む
  - ふるさと島根定住財団のUIターン促進活動
  - しまコトアカデミー
  - 各地域での多様な取り組みで活性化
- 「人口の数の問題ではない」というけれど
  - ここでも費用対効果が考えられているか不安
  - Uターンと、Iターンは区別しておくべきでは？
  - 大卒層と非大卒層の区別は必要ないか？
    - 島根に責任をもつエリート人材の確保は重要
  - 「風の人」はアリ？
    - 人口の「非正規化」の流れは止めようがないのか？

18

県に提言！中途採用専門・管理職枠の確保

- 島根にゆかりの県外在住大卒層は10生年で3万人
- 「いずれは島根に、でも22歳の今じゃない」という多くの声
- 県主導で県内専門・管理職枠30名を確保
- 30～40歳の大卒層に限定して「県職員」として雇用を確約
  - 県内有力企業の専門職・管理職ポスト、自治体行政担当者、教員など
- 「振り返ったら、島根県は自分を待っている」という体制づくり
- 個別のUIターン対応ではなく、18歳、22歳のように目に見える ローカル・トラックの節目を県民全体に示す

19

県外流出者

関係人口

21

流出のローカル・トラック
- 鉄穴（かんな）流しの歴史

関係人口づくり
- 現代のくにびき神話

22

島根大学法文学部山陰研究センターシンポジウム
「地方創生」再考

中間支援組織から見た「地方創生」の現場について

平成30年6月30日

一般社団法人 小さな拠点ネットワーク研究所　代表理事　白石絢也

自己紹介

1. 昭和55年（1980）　島根県大田市生まれ
2. 勤務
   - 一般社団法人小さな拠点ネットワーク研究所（2016年～）
   - SPReD | Space For Regional Design（2012年～）
3. 連絡先　2012spred@gmail.com
4. Blog　「SPReD 中山間地域のまちづくりインフォメーション」
   http://spred-info.blogspot.jp/
5. 経歴
   - 島根大学法文学部社会システム学科修了（社会学）
   - 島根大学大学院生物資源科学研究科修士課程修了
6. 所属
   - 関西社会学会
   - 地域活性学会
   - 行政経営フォーラム
7. 専門
   - 観光・まち歩きを中心とした地域政策
   - 中山間地域等条件不利地域における集落・地域支援
   - 地域振興を目的とした団体等における資金調達支援
   - ワークショップの企画運営

中山間地域とは

1. **島根県内の指定地域**

中山間地域の様子

1. **中山間地域は疲弊している？**
   - 中山間地域を取り巻く現状はたしかに厳しい状況もある
   - 一方で、それを乗り越え、地域を元気にしようとする新しい動きもある
   - 中山間地域は疲弊し、助けを待っているばかりではなく、みずから地域を見つめ直し、何が出来るかを考え動き出している

一気に負荷がかかり始める都市団地

1. **都市の現状は地方を支えられるか**
   - 都市の集合団地・マンション
     I. 数年で一気呵成に開発した結果、一気に高齢化を迎えつつあり、その状況は地方の中山間地域よりも深刻
        - 近隣のコミュニケーションがない、生産基盤（田畑）がない　など
     II. そのため、これまでの「都市が地方（田舎）を助ける」というロジックは成立しなくなる
     III. 地方には都市からの「支援」に頼るのではなく、協力して取り組む姿勢、仕組みが必要

自分たちができることを見つめ、動き出したケースについて紹介

中山間地域の様子

1. **今後の中山間地域のキーワード**
   - エネルギー：再生可能エネルギー、利用方法、ガソリンスタンド
   - 食：農業、林業、水産業、加工食品、直売所
   - 教育：幼保、小学校、中学校
   - 担い手：若者、マネージメントできる人材⇔プレイヤーはいる
     I. 外部人材
        - 地域おこし協力隊、緑のふるさと協力隊
     II. 内部人材
        - 集落支援員、市町村役場、公民館、NPO法人

中山間地域の様子

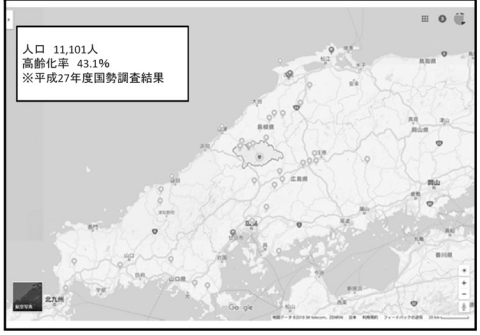
1. **島根県内の地域の現状を把握するサイト**

■しまねの郷づくりカルテ

I. http://satodukuri.pref.shimane.lg.jp/karute

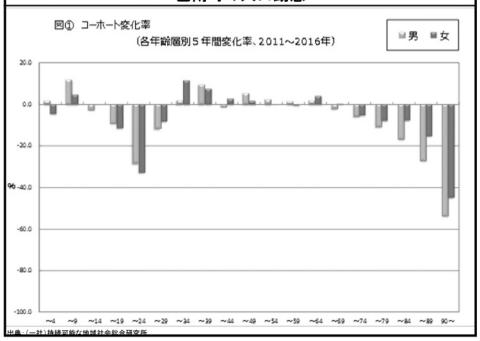
島根県邑南町

島根県邑南町

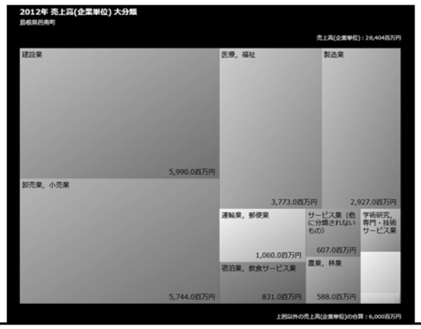


邑南町の中心部

邑南町の人口動態



邑南町の産業構造



邑南町の政策　3つの柱

1. **日本一の子育て村**
   - 邑南町は「日本一の子育て村を目指して」を合言葉に、子育て世代が暮らしやすいまちづくりを推進している。
   - 具体的には中学校卒業までの子どもの医療費無料化、子育て支援手当、不妊治療費の助成など様々な担当課において子育てしやすいまちづくりの実現に向けて取り組みが展開されている。

邑南町の政策　3つの柱

2. **A級グルメ**
   - 平成23年に策定された「邑南町農林商工等連携ビジョン」
     I. 本町で生産される良質な農林産物を素材とする、「ここでしか味わえない食 や体験」を“A級グルメ”と称し、“A級グルメ”の創出・普及を通じた地域ブランドの構築と関連産業の活性化を実現する

邑南町の政策　3つの柱

3. **地区別戦略**
   - 地区別戦略実現事業は、まち・ひと・しごと創生法(平成26年法律第136号)第10条の規定に基づく邑南町版まち・ひと・しごと創生総合戦略に掲げる12公民館単位の各地区別戦略(以下「地区別戦略」という。)を実現するため、地域住民組織等が主体となって取り組む活動を支援することにより、地域の人口減少に歯止めをかけるとともに、交流人口の増加を促進し、地域の活性化を図ることを目的とする

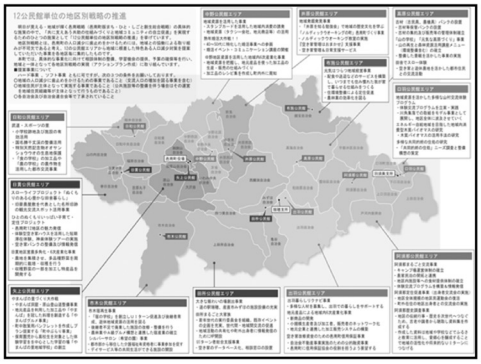
地区別戦略実現事業の概要

1. **地区別戦略実現事業とは**

エリア	公民館エリア単位
組織	地域の合意形成が図ることができる組織
事業内容	①人口減少に歯止めをかける事業 ②交流人口の増加に寄与する事業

↓

平成２８（２０１６）～３１（２０１９）年度までの４年間、
全１２地区に３００万円ずつ実現支援のための補助金として交付



各地区の地区別戦略に掲げられたテーマ

地区・テーマ	地域概況	空き家／土地	エネルギー	のさら構造	交流	体験づくり	産業	子育て	健康・福祉
新津南（8）	A2日：772人 必要戦略：1.5戦				○ 地域内外の交流拠点（空き店舗利用）			○ ふるさと教育、歴史調査	
日吉（4）	A2日：766人 必要戦略：1.2戦		○ 木質バイオマス	○ LLP中心	○ 川角集落中心の交流プロジェクト	○ LLP設立			○ 続けるわか
新潟（1）	A2日：454人 必要戦略：0.4戦					○ LLC設立（済）	○市木語尾生 ものづくり		○シルバーサロン 福祉ボランティア アンケート調査検討
新潟（5）	A2日：1,813人 必要戦略：1.9戦	○ 空き家調査			○ 通の駅を中心とした小さな拠点	○ 年代、地区を超えた交流			
新潟（1）	A2日：893人 必要戦略：0.6戦	○ 空き家管理			○ 出河江ビジネスフィールド	○ 地域活躍＆交流スペース	○ 空き家サポートセンター	○ Y-Jobプロジェクト	
新潟（2）	A2日：899人 必要戦略：0.9戦		○ 山の学校		○ 地域マスコット体験	△ 一部法人化必要性検討	○ 古材バンク		
有明（1）	A2日：189人 必要戦略：0.5戦	○		○ 福祉のさら拠点		○ 法人設立検討	○ 農業		○ 福祉
和上（5）	A2日：2,246人 必要戦略：1.5戦				○ 黄山登山道整備		○ 歴史遺産ツアメニュー	○ 地域子育て、高齢者向上の連携	
中野（4）	A2日：1,560人 必要戦略：1.6戦				熱帯植物大作戦		○ G天空事業化		○ スタンプラリー、サクラ・ル・ビ配ケーピス
新潟（4）	A2日：685人 必要戦略：0.4戦				○	○ 法人設立検討			○ ノルディックウォーキング
豊栄（5）	A2日：492人 必要戦略：1.2戦	○ 空き家ストック			○ デスストウスノ／ショップ	○ 法人設立検討	○ イノシシ対ブ	○ 対応の学習機会	
豊栄（3）	A2日：436人 必要戦略：0.2戦	○ 空き家解体			○		○ イベント等で特産品販売		

注1　○内は自治体。
注2　必要戦略は地域住民大学のパ［ュ］ュ［ュ］ュ［ュ］ュ

邑南町日貫地区

1. データ

項目	数値
人口	543人
世帯数	209
高齢化率	41.3
高齢者単独世帯数	41
20～30代女性比率	5.3

邑南町日貫地区

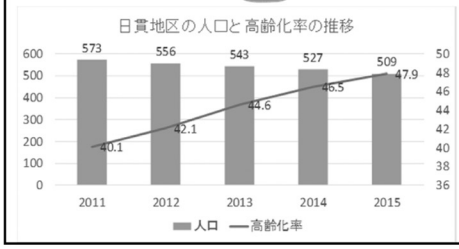
邑南町日貫地区

1. 人口推移

■ 人口減少と高齢化が進行

保育園児　10人

小学生児童数　14人



邑南町日貫地区

1. 日貫地区の地区別戦略

■ 3部にわかれて検討

I. 生活部：「川辺の学園」と空き家活用　など

II. 産業部：イノシシ肉を使ったギョウザ販売　など

III. 観光部：山崎御三家を使ったゲストハウス／シェアハウス　など

➡ すべて「定住」につながるように

Hinui Hitohi / HH

日貫一日

～高価格帯ゲストハウス運営を通じた観光事業計画書～

日貫一日/ Hinui Hitohi

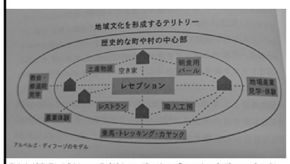
1. 空き家を活用した高価格帯ゲストハウスプロジェクト

■ 邑南町版アルベルゴ・ディフーゾ　1棟貸しによるゲストハウス

I. 地域内の空き家を活用して高価格帯のゲストハウス整備（予算は各種補助事業を活用中）

II. 地域内の空き倉庫を活用してフロント棟兼カフェ整備

日貫一日/ Hinui Hitohi



私たちが実現しようとしているビジネスモデルはこの「アルベルゴ・ディフーゾ」に似ています。
アルベルゴ・ディフーゾの特徴は

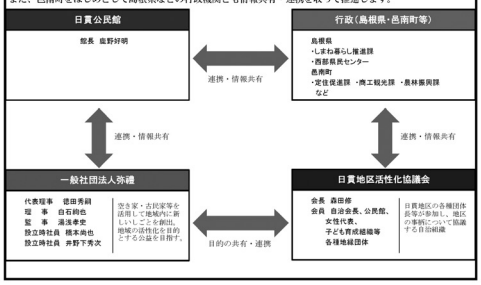
- *地元の食材を使った地産地消メニューを揃えたレストラン経営*
  - *食を通じた交流は言葉を超える*
- *朝食を提供するレストランやバールは地元にも開放されている*
  - *地元の老人がふらっと立ち寄るアルベルゴ・ディフーゾは、住民との連携が弓まいっている証*

とされています。
（出典：『エリアリノベーション海外編』学芸出版社,2017.12.10.

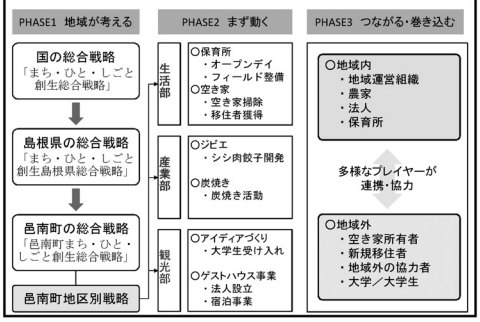
地域内の機能・資源分布図

日貫一日/ Hinui Hitohi

日貫地区の自治組織である日貫地区活性化協議会、地域の集いの拠点ともなっている公民館等と連携し、目的意識を共有して取り組みます。
また、邑南町をはじめとして島根県などの行政機関とも情報共有・連携を取って推進します。



日貫地区を通じて見える「地方創生」



「地区別戦略」の現時点での成果と課題

1. 成果
   - 全12地区が具体的な取り組みを展開（着実に前進）
   - 全町横断的な連係創出
     - I. 情報共有の場（事務局会議）
     - II. kintoneを使ったコミュニケーション
     - III. 横つなぎのテーマ別研修

現時点での成果と課題

2. 課題
   - 他人事から自分ごとへの転換（意識変容）
   - 主力メンバーの固定化と参加の輪の広げ方
   - 法人化・経済事業等への参入についてのリスク管理

現時点での成果と課題

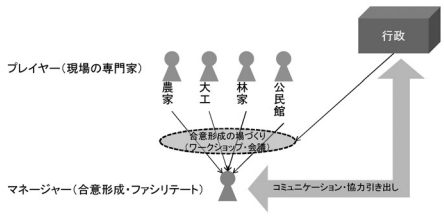
3. 所感
   - 地方版総合戦略に合わせて、1次生活圏（公民館区）ごとの戦略を策定し、実行支援していることの意義
   - 地区ごとの特色（人口構成、地域性等）によって取り組みは多様化しており、それを事務局・役員レベルでは整理しておくことが必要
   - 年間300万円の支援交付金を使い切ることが良いのか悪いのか
   - 地域住民に対して信頼をする
   - 地域のペースを大事にしながら、少し後押しするさじ加減の難しさ

中山間地域で求められること

1. 都市と農村との併存
   - 都市が支え、農村が支えられる一方的な関係性の変化
   - 「田舎の田舎」への回帰（中山間地域研究センター）
   - 30代の都市住民が中山間地域に移住・就農
2. プレイヤーとマネージャー
   - 中山間地域でもどこでも、現場で力を発揮できる人材は存在する
   - 中山間地域に不足しているのは、マネージャー
   - 各プレイヤーを結びつけ、行政等とコミュニケーションでき、プロジェクトの進行を管理できる人材＝マネージャー
3. 力を引き出す仕組み
   - 条件の悪い地域を正面から見つめなおし、評価する取り組み＝地元学
   - そこで暮らすことを肯定し、魅力を引き出す＝交流プロジェクト
   - それらを引き出す住民同士の意見を引き出す場、合意形成

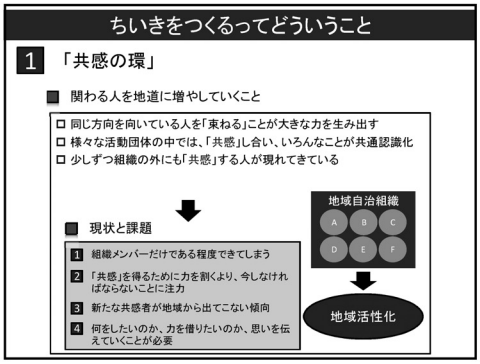
中山間地域で求められること

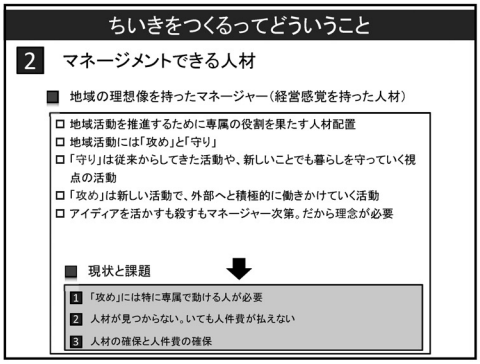
マネージャーの役割

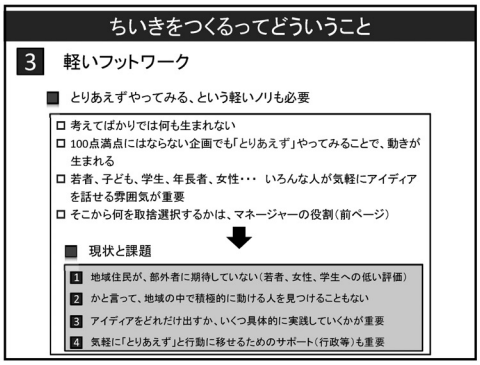


中山間地域で求められること

4. 域内循環
   - 経済、エネルギー、食料等の域内循環を目指す
   - 他所の方が少し安いからと他所で買うと、多くのお金が域外流出する
   - 少し高くても地域の店で買うと、多くのお金が域内で循環する
     - I. 域内で経済循環が起これば、少しずつ雇用の可能性が増す
     - II. 小規模の収入源でも、いくつかを束ねることで1人分の所得創出につながる
     - III. 所得が確保できればUIターン者を誘引できる


ちいきをつくるってどういうこと
1 「共感の環」
関わる人を地道に増やしていくこと
同じ方向を向いている人を「束ねる」ことが大きな力を生み出す
様々な活動団体の中では、「共感」し合い、いろんなことが共通認識化
少しずつ組織の外にも「共感」する人が現れてきている
現状と課題
1 組織メンバーだけである程度できてしまう
2 「共感」を得るために力を割くより、今しなければならないことに注力
3 新たな共感者が地域から出てこない傾向
4 何をしたいのか、力を借りたいのか、思いを伝えていくことが必要
地域自治組織
A B C
D E F
地域活性化


ちいきをつくるってどういうこと
2 マネージメントできる人材
地域の理想像を持ったマネージャー（経営感覚を持った人材）
地域活動を推進するために専属の役割を果たす人材配置
地域活動には「攻め」と「守り」
「守り」は従来からしてきた活動や、新しいことでも暮らしを守っていく視点の活動
「攻め」は新しい活動で、外部へと積極的に働きかけていく活動
アイディアを活かすも殺すもマネージャー次第。だから理念が必要
現状と課題
1 「攻め」には特に専属で動ける人が必要
2 人材が見つからない。いても人件費が払えない
3 人材の確保と人件費の確保


ちいきをつくるってどういうこと
3 軽いフットワーク
とりあえずやってみる、という軽いノリも必要
考えてばかりでは何も生まれない
100点満点にはならない企画でも「とりあえず」やってみることで、動きが生まれる
若者、子ども、学生、年長者、女性・・・ いろんな人が気軽にアイディアを話せる雰囲気が重要
そこから何を取捨選択するかは、マネージャーの役割（前ページ）
現状と課題
1 地域住民が、部外者に期待していない（若者、女性、学生への低い評価）
2 かと言って、地域の中で積極的に動ける人を見つけることもない
3 アイディアをどれだけ出すか、いくつ具体的に実践していくかが重要
4 気軽に「とりあえず」と行動に移せるためのサポート（行政等）も重要

看護で地域を元気に！
たくさんの幸せな人が溢れるまちづくり

Community Care

地域課題×ビジネス×暮らし
地方から創る新しい“働き方”の提案。

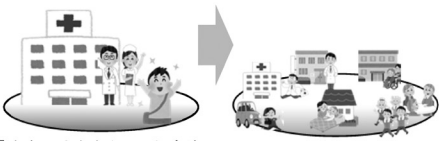
株式会社Community Care　中澤　ちひろ

経歴

神奈川県相模原市生まれ
平成21年　日本赤十字看護大学卒（東京）
平成21年　津久井赤十字病院（神奈川県）
平成26年　庄原赤十字病院（広島県で研修）
平成27年　NPO法人おっちらぼ（島根県に移住）
　訪問看護ステーションコミケア立ち上げ
平成28年～　株式会社 Community Care　代表取締役（結婚）
平成29年～　Community Nurse Company 株式会社　取締役（出産）

これからの地域医療

病院から　　暮らしの場へ



「治す」ことを中心にした病院
完結型の医療から

暮らしの中で病と共に歩む時代
「治し・支える医療」へ

中山間地域で出会った現状

少子高齢化により医療・介護を必要とする人は増加
一旦入院すると介護力が弱くで家に帰れない
山間部はアクセスが悪く、通院が大変

地域の医療機能が縮小
医師の高齢化と担い手不足で診療所の閉鎖
人材不足と非効率な立地で訪問系サービスが縮小

病院が地域医療を一挙に担うと・・・
救急搬送の増加
人材不足・過剰業務

病院しか頼る
ところがない
と・・・

地域医療を守るために感じたこと

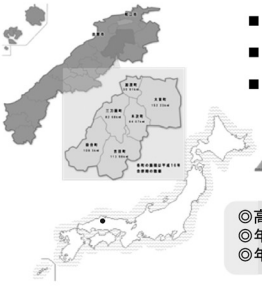
- 若い看護師が活躍できる環境が必要。
- 退院した患者を支えるために、病院以外で看護師が働く場所、家庭を持ちながらでも働ける働き方が必要。
- 医療分野だけでなく、地域みんなで持続可能な地域社会の創造が必要。

地域の中で暮らしを支える看護師
コミュニティナース

元気なうちから住民と知り合い、
“毎日の楽しい”と“心と身体の健康と安心”を
住民と一緒につくります

島根県　雲南市

H16.11.1誕生



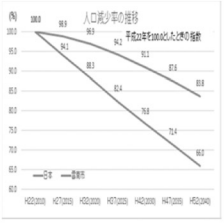
- 人口　39，032人
  （平成27年国勢調査）
- 世帯　12，527世帯
  （平成27年国勢調査）
- 面積　553．4㎢
  （東京23区の約9割）

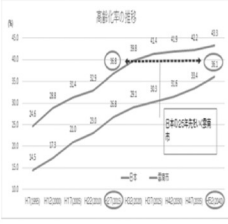
市域の大半が林野

◎高齢化率　36.5%（H27）
◎年少人口割合　11.8%（H27）
◎年間500人ずつ人口減

雲南市の現状　日本の25年先をいく高齢化社会。

高い人口減少率　　高齢化率36.8%





8

土台となる雲南市の地域づくりの特徴

子どもチャレンジ　保幼小中高一貫した「キャリア教育」

市内若者、大学生、教育系NPO等がぞくぞくと雲南市の教育に参加。夢や目標を語り合い、将来を考える場となっている。

若者チャレンジ　若手の課題解決人材を育成する「幸雲南塾」

５年間で６６名の卒業生を蓄出。志ある若者がつながって、ネットワークは市内外に広がっている。ビジネスモデルも誕生しつつある。

大人チャレンジ　地域自主組織「地域自主組織」

小売店の撤退を受け、交流センター内に地域で運営する「店舗」を開設するなど、地域課題解決に向け活動の幅が広がってきている。

雲南市のチャレンジプロジェクト生態系図

地域プロデューサー養成講座「幸雲南塾」（2011年～）

学びと実践の機会を通して、本気で継続して地域を良くする成果を出せる人材を育成する塾（ローカルチャレンジャーを生み出す塾）

2013年より、地域をより良くしようと本気で取り組む市民の学びや実践を支援する、中間支援組織のNPO法人おっちラボが、若者チャレンジを支援。

『幸雲南塾』

医療・福祉分野でも地域をフィールドに
若者によるチャレンジが始まっていた

先行事例

まゆちゃんの宅配便　3期生

雲南市内の独居高齢者や特定高齢者のお宅へ訪問し、買い物支援に＋その人に合った健康づくり活動の情報提供や体調の観察等を実施。必要時医療関係機関や地域の福祉委員等へつなぐ。

コミュニティナース部　3期生

まゆちゃんの宅配便やイイトコ発見プロジェクト等に、学生の間から参加できるような仕組みとして、島根大学医学部内に設置。将来は地域医療に従事したいという熱い思いを持った学生が多数参加している。

ぼくらのHappy恋愛塾2014 ～自分と相手を　大切にできる生教育～

4期生

高校生を対象に、「生」について考え、語り合う場づくり。医療系学生だからこそできる、「今、よりよく生きること」をサポートしていくアワープラン！

みんなで育てる小さな芽 ～障がい児の自立を目指して～

4期生

地域で暮らしている障がいを持つ子どもたちが、自信を持っていきいきと雲南で暮らしていけるようにするための、学生ボランティアの新しい交流のながれをつくる！

雲南市と出会い、看護師がUIターン 地域医療課題へチャレンジ！！

地域に看護を届けたい

病院には帰りたくても帰れない人たちがいた・・

雲南市の地域医療課題　在宅医療資源が不足している！

H26年時点

超少子高齢化社会

- 高齢化率36.5%
- 要介護度が全国と比べ高い
- 老老介護、独居老人の増加
- 家庭での介護力の低下

若手医療職種の不足

- 訪問看護ステーションの閉鎖と訪問看護師不足：H26時点で人口1万人対1.9人（全国は3.2人）
- 開業医の後継者がいない
- 開業医の高齢化に伴い往診医がいない地域がある

地理的な問題

- 車などがないと医療機関へのアクセスが悪い
- 山間部に集落が点在し、訪問系のサービスは非効率

在宅医療の空白地帯！

このまま行くと

- ◆ 社会保障費の高騰
- ◆ 担い手がいないため地域医療の崩壊
- ◆ 住まう場所として選ばれない土地に

みんなでつくる幸せな人が
あふれるまちづくり

地域の資源を知り、活かし、創る
みんなでつくる幸せな人があふれるまち

Community Care

持続可能な地域医療を目指してコミケアの３つの活動

訪問看護で
在宅医療を守る

若手地域医療
ネットワーク構築

地域住民と
一緒に健康な
まちづくり

中山間地域の訪問看護にチャレンジ

H27年訪問看護ステーションコミケアを開設。

人材不足や一軒一軒家が遠いため、サービス効率が悪く、経営的に難しい訪問看護に、ICTの活用や若手の採用で事業化。医師の指示の元、ご自宅に訪問し看護サービスを提供。

市立病院での研修や、NPOおっちラボによるバックオフィス支援や関係機関との顔つなぎなどの支援を受ける。

都市部のステーションからのノウハウ支援を受け、若手訪問看護師の育成やICTなどの活用を学ぶ。

若手医療ネットワーク構築

若手医療・介護の輪を広げ、繋がる

中山間地域では、20-30代の働く若者世代が流出している。施設・職種・地域を超えて若手医療・福祉・介護が地域医療というキーワードで繋がり、学び合い、お互いに協力しあえる関係づくりを目指し、まずは自分たちの周りから関係づくりを開始。

介護施設で勉強会を開催

きらきら地域医療カフェ@うんなん

若手医療ネットワーク構築

地元の学生へ地域医療の魅力を発信する

日本の中山間地域は約７割。少子高齢化で医療・介護の問題が大きくなっている中山間地域こそ、日本の医療の最先端。教育系NPOや地元の中高からの依頼を受け、積極的に授業の講師や受け入れいを２～３ヶ月に１度定期的に実施。

地域住民と一緒に健康なまちづくり

地域住民と考え、実行する地域の健康なまちづくり活動

地域の「困った」を拾い、地域自主組織と協働して、健康調査などを実施。
地域自主組織の健康づくり事業が自走できるようサポート。

運動を広めたり、通いの場が広がるなど、
一緒に活動した地域が自主的に健康づくりを開始し、定期的にサポート。

地域の中で集まれるところ
もなくなって、私らは、もう
家でテレビを見て過ごすだ
けだわ。。。

商店街模型

空家になった書店

空家を地域の拠点に

みとや世代間交流施設「ほほ笑み」の誕生　H27.11.5

変化

■ **訪問看護で在宅療養という選択肢ができた**

- 利用者総数　182人
- 現在80人
- 在宅でのお看取り　21件

■ **地域の医療機関と連携して、在宅医療体制が整い始めた**

・在宅医療が提供できなかった地域でも訪問診療が受けれる体制が整いつつある。

変化　■ 地域活動に他の施設の専門職や学生が参画

- 高校生や大学生のサロン参加
- 自主研究として、訪問看護や地域医療を調べる学生も出てきた
- 進学を決めた学生
- 市外で働いていた専門職が雲南市内に転職

世代を超えて広がる地域の輪

変化　■ 地域の主体的な健康づくりを促進

地域の健康状態の特性を知り、通いの場でのご当地運動を広げる取り組みを本格的に開始。

コミュニティナースが地域の公民館に専従。地域に住む看護師さんチーム「ちょんてご」が結成され、地域の見守り活動が広がる。

変化　■ 3人から始まったチャレンジは、10人に拡大。徐々に地元の人が参画してきている。

県外からのUターン3人・Iターン1人、市外から4人
職種：看護師、助産師、療法士、事務員

これから

- 柔軟な働き方でキャリアと生活を築く
  本人の「やりたい」という思いを大切にした組織運営。新しさやワクワクも大切にする。
- 地域に必要とされる組織に成長し、地域を一緒に創る
  地域と関係性を築き、住んでいる人が幸せを感じられるような地域づくり

2016年～ 看護を地域に届けて、地域を元気にしたい！！

雲南市での実践を元となり、コミュニティナース育成事業が開始

2016年～東京でコミュニティナースの講座を開始。
2017年～Community Nurse Company株式会社を設立。

地域のために何かしたい、病気になる前から、人々の健康や幸福に寄与したい、と全国から看護師が集まっている。現在6期で100名の卒業生を排出。

全国様々な形で活動するコミュニティナースたち

今年から雲南市に
地域専従のコミュニティナース2名が新たに誕生！

看護で地域を元気に！
みんなでつくる幸せな人が溢れるまち

ご静聴ありがとうございます

島根大学法文学部山陰研究センターシンポジウム

「地方創生」再考

島根のこれからを考えるための新たな視点

2018.6.30（土）13:30～16:00

島根大学松江キャンパス
大学会館３階大集会室（島根県松江市西川津町 1060）

人口減少への歯止めを基本とした「地方創生」が語られ、地方自治体の政策もすすめられてきました。あらためて実際の生活感覚や地域住民の目線から捉えたとき、「人口減少対策」、「地方創生」や「地域活性化策」はどのように映るのでしょうか。地域住民のふだんの生活感覚や地域再生に取り組む方々の経験に寄り添いながら、地域再生にむけて念頭におくべき論点を探ります。

▲基調講演

島根県のローカル・トラックと関係人口

吉川　徹　氏
（大阪大学大学院人間科学研究科）

▲パネルディスカッション

住民の生活感覚と地域再生の現場から問う「地方創生」

個別報告▲

島根県のしまコトアカデミーにみる関係人口づくりのプロセス

田中輝美 氏（ローカルジャーナリスト）

中間支援組織から見た「地方創生」の現場について

白石絢也 氏（SPReD 代表）

看護で地域を元気に！幸せな人が溢れるまちづくり

中澤ちひろ 氏（株式会社 Community Care）

▲申込み不要
▼入場無料

主催・問いあわせ先：島根大学法文学部山陰研究センター

島根大学法文学部山陰研究センター
電　話：0852-32-9833
メール：admin-src@soc.shimane-u.ac.jp
Ｗｅｂ：http://albatross.soc.shimane-u.ac.jp/src/

タイムスケジュール

13:30～13:35　趣旨説明

13:35～14:15　基調講演

島根県のローカル・トラックと関係人口

吉川　徹　氏（大阪大学大学院人間科学研究科）

14:15～15:15　個別報告

島根県のしまコトアカデミーにみる関係人口づくりのプロセス

田中輝美 氏（ローカルジャーナリスト）

中間支援組織から見た「地方創生」の現場について

白石絢也 氏（SPReD 代表）

看護で地域を元気に！幸せな人が溢れるまちづくり

中澤ちひろ 氏（株式会社 Community Care）

15:15～15:20　休　　憩

15:20～16:00　パネルディスカッション

住民の生活感覚と地域再生の現場から問う「地方創生」

コーディネーター：福井栄二郎（島根大学法文学部）
コメンテーター：片岡佳美（島根大学法文学部）
＋講演者・報告者による全体討論

パネリストプロフィール

吉川　徹（きっかわとおる）

1966 年松江市生まれ。
大阪大学大学院人間科学研究科教授、専門は社会学。
主な著書に『日本の分断』（光文社新書）、『現代日本の「社会の心」』（有斐閣）、『学歴分断社会』（ちくま新書）、『学歴社会のローカル・トラック』（世界思想社）など。

田中輝美（たなかてるみ）

山陰中央新報記者を経て独立。島根に暮らし、島根のニュースを記録、発信している。
著書に『関係人口をつくる』（木楽舎）『未来を変えた島の学校―隠岐島前発ふるさと再興への挑戦』（岩波書店）『地域ではたらく「風の人」という新しい選択』（ハーベスト出版）など。

白石絢也（しらいしじゅんや）

SPReD 代表・小さな拠点ネットワーク研究所代表理事。
まちづくりコンサルティングを専門とし，条件不利地域における地域振興，観光振興などをテーマに地域のペースを大事にしながらサポートを展開中。

中澤ちひろ（なかざわちひろ）

神奈川県出身。株式会社 Community Care 代表取締役、Community Nurse Company 取締役。
看護師として神奈川県や広島県の県境の過疎地域での臨床を経て、地域医療の魅力を知る。2015 年島根県雲南市に移住。現在は、雲南市を中心に在宅医療や住民主体の地域ケアを目指し活動中。

島根大学法文学部山陰研究センターシンポジウム

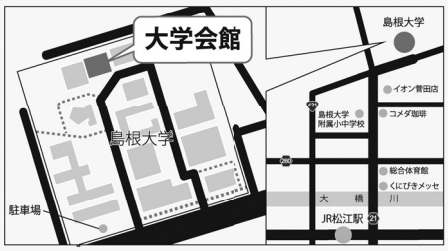
「地方創生」再考

島根のこれからを考えるための新たな視点

＜会場へのアクセス＞JR 松江駅から

バス
・北循環線内回り（のりば①）
・島根大学・川津（のりば②）

北循環線内回り 15分
島根大学・川津 20分
「島根大学前」
島根大学

車・タクシー
10分

※バスはほかにも、「平成ニュータウン」「あじさい団地」（松江市営バス）、「美保関ターミナル」「マリンゲートしまね」（一畑バス）があります。いずれも松江駅バスターミナル 乗り場②です。
※お車でお越しの際は正面入り口前の守衛室で入構証を受け取り、指示に従って構内に駐車してください。会場付近の住民の皆様のご迷惑になりますので、路上駐車及び近隣店舗への無断駐車は固くお断り致します。